

**Activities of the
Research Center for
Urban Safety and Security
Kobe University
(Fiscal Year 2016)**

神戸大学都市安全研究センター | 平成二十九年三月

神戸大学

都市安全研究センター

活動報告 第二十二号

RCUSS

**Research Center for Urban Safety and Security
Kobe University**

神戸大学都市安全研究センター活動報告（平成28年度）

Activities of Research Center for Urban Safety and Security Kobe University (Fiscal Year 2016)

第 21 号

目 次

1. 都市安全研究センター設置の趣旨及び沿革	1
1.1 設立の趣旨	1
1.2 沿革	2
2. 活動内容、教員構成及び組織図	3
3. 活動プロジェクト	6
4. 都市安全研究センターの運営	8
4.1 運営委員会	8
4.2 プロジェクト推進・評価	10
5. 協力教員による活動	11
5.1 協力教員構成	11
5.2 公募型プロジェクト	14
5.3 自然災害の現地調査研究公募	14
6. 主な設備及び備品	15
7. 野外調査・観測地及び緊急調査の実施	17
7.1 野外調査・観測地	17
7.2 緊急調査の実施	17
8. 都市安全研究センター発行物	18
9. 会議開催等	19
9.1 主催	19
9.2 共催	26
9.3 中高生への説明会	26
9.4 その他	27
10.	28
非公開	28
	30
	32
11. 国際・国内交流活動	33
12.	34
非公開	34
	36
13. 研究費	37

13.1	科学研究費	-----	37
		-----	38
	非公開	-----	39
		-----	40
		-----	40
14.	教育活動	-----	41
14.1	講義科目	-----	41
	非公開	-----	43
14.3	その他	-----	43
15.	研究業績	-----	44
15.1	研究現状の紹介（研究テーマ）	-----	44
15.2	著書	-----	46
15.3	学術論文	-----	46
15.4	学術報告	-----	51
15.5	学術講演	-----	52
16.	研究指導	-----	61
16.1	博士論文	-----	61
16.2	修士論文	-----	61
16.3	卒業研究	-----	63
付録	センター活動の報道記録		

1. 都市安全研究センター設置の趣旨及び沿革

1.1 設立の趣旨

都市安全研究センターは、「安全かつ快適な都市の理念を構築し、及びそれを実現するための手法、システムについて総合的に教育研究を行い、もって活力ある都市の創出に寄与する」ことを目的に、平成8年5月11日に設置された。

都市は、活力ある生産・経済・文化活動の場として多様で豊富な機能を備え、また潤いある生活の場として快適で良好な環境であることが求められるが、何にもまして安全で安心な場であることが求められている。しかし都市は、つねに集中化や過密化を伴う巨大で複雑なシステムであり、同時に地震や洪水等の自然災害あるいは人間活動による環境破壊や汚染によって壊滅的な打撃を受けかねない繊細なシステムでもある。

平成7年1月17日の兵庫県南部地震によって、我々は、余りにも多くの尊い犠牲を払って、都市の脆弱性をあらためて認識し、都市の安全確保のために総合的な研究の展開と遂行が必要であることを痛感させられた。神戸大学は、被災地の総合大学として、貴重な体験を基礎に、真に安全・安心な都市の創出をめざして、都市ゆえに生じる多種多様な災害についてハード及びソフトの両面から学際的かつ総合的に研究するため、その中核として研究センターの設置を文部省に申請し、これが認められて当研究センターが設立された。なお、創設にあたって、工学部附属土地造成工学研究施設は発展的に拡充改組する形で廃止され、その研究成果と研究活動は当センターに継承されることとなった。

設立10周年を迎えた平成18年4月には、全面的な改組（3大研究分野体制：リスク・アセスメント、リスク・マネジメント、リスク・コミュニケーション）を行い、「防災」と「減災」の両面に立脚した、より積極的に住民の命を守ることを目的とした安心・安全な社会の構築を目指す仕組みや手法の研究を推進していくこととなった。

1.2 沿革

平成8年5月11日	神戸大学都市安全研究センター 新設 都市構成研究分野（教授1名，助教授1名） 都市基盤研究分野（教授2名，助教授2名，助手1名） 都市地震研究分野（教授1名，助教授1名） 都市安全医学研究分野（教授1名，助教授1名） 都市行政産業基盤研究分野（客員教授2名） 工学部長 片岡 邦夫 教授 センター長に就任
平成9年4月1日	都市情報システム研究分野（教授1名，助教授1名，助手1名）増設
平成10年4月1日	工学部長 北村新三 教授 第2代センター長に就任
平成10年4月9日	都市安全マネジメント研究分野（教授1名，助教授1名）増設
平成12年4月1日	工学部長 森脇俊道 教授 第3代センター長に就任
平成16年4月1日	工学部長 薄井洋基 教授 第4代センター長に就任
平成18年4月1日	3大研究分野へ改組（教員16名，客員2名） リスク・アセスメント大研究分野 リスク・マネジメント大研究分野 DMAT・災害支援特別部門（助教授1名 3年時限） リスク・コミュニケーション大研究分野
平成19年2月16日	工学部長 森本政之 教授 第5代センター長に就任
平成19年4月1日	沖村孝 教授 第6代センター長に就任
平成20年4月1日	有木康雄 教授 第7代センター長に就任
平成22年4月1日	田中泰雄 教授 第8代センター長に就任
平成24年4月1日	飯塚 敦 教授 第9代センター長に就任
平成26年4月1日	北後明彦 教授 第10代センター長に就任
平成28年4月1日	大石 哲 教授 第11代センター長に就任

2. 活動内容，教員構成及び組織図

リスク・アセスメント研究分野

地震，津波，豪雨などの自然災害及び環境破壊，事故，火災などの人為災害に対する都市機能，生活環境の靱性能の定量的評価と防災・減災を目的にした施策を学際的に研究する。地震メカニズムの解明，都市環境に対する災害リスクの同定と定量化，防災・減災を主眼とした安全環境整備への方策を追究し，安全・安心で環境負荷の少ない都市の創生・再生へ向けてのシナリオ・マップの策定を目指す。

地震災害リスク評価研究分野

教授 吉岡祥一
准教授 廣瀬 仁

地盤環境リスク評価研究分野

教授 飯塚 敦
講師 橋 伸也

リスク・マネジメント研究分野

都市災害が発生した時，社会が災害から受ける影響を最小とするための方策について研究する。具体的には，都市施設，医療・生活，行政・経済面の災害発生時における緊急対応の方法，被災社会の復旧・復興過程における短気・中長期の視野に基づく各項目で取りうる最善な方策及び災害発生時の影響を最小にするために，都市施設，医療・生活，行政・経済の各システムについて事前に整備しておくべき方策などについて研究する。

社会基盤マネジメント研究分野

教授 長尾 毅

減災エリアマネジメント研究分野

教授 北後明彦
准教授 藤永 隆

産業・経済危機管理マネジメント研究分野

外国人研究員

客員准教授 Marina MANEA （平成28年4月～平成28年6月）
客員教授 青地秀雄 （平成28年7月～平成28年9月）
Zhila Pooyan （平成28年10月～平成29年3月）

客員研究員

客員教授 紺野克昭 （平成28年度前期）
客員教授 瀬古 弘 （平成28年度後期）

リスク・コミュニケーション研究分野

都市域における防災・減災を達成するため，リスク・コミュニケーションによる人々のリスク認識の向上や意志決定のサポートなどの手法について研究する。具体的には，住民や各機関との双方向の情報通信手段や防災教育に関する研究ならびに先端技術を応用した災害情報共有のための災害情報モニタリング，災害情報収集システムに関する研究を行う。

情報コミュニケーション研究分野

准教授 滝口哲也

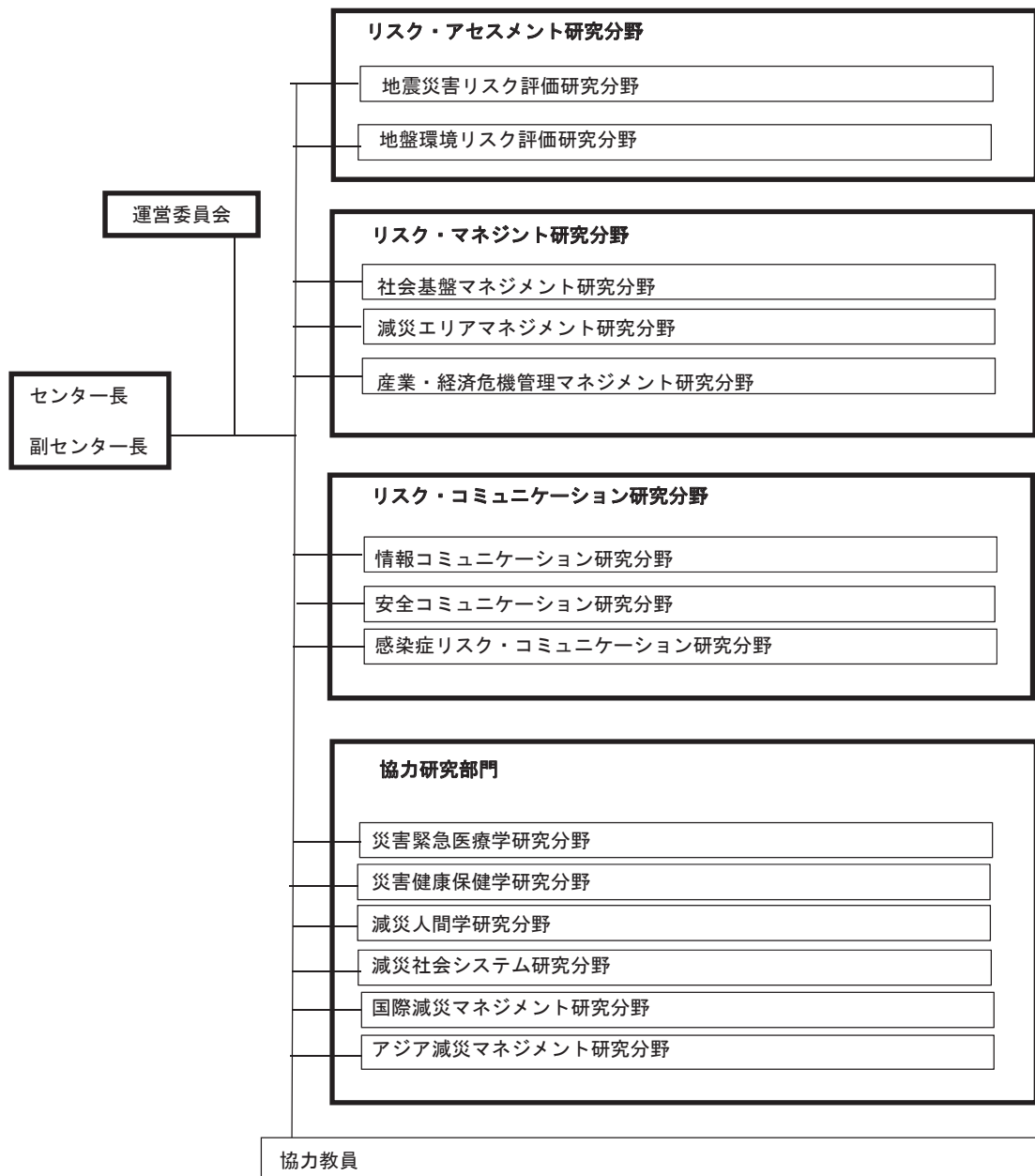
安全コミュニケーション研究分野

教授 大石 哲

准教授 小林健一郎
感染症リスクマネジメント研究分野
教授 岩田健太郎
准教授 大路 剛

協力研究部門

災害緊急医療学研究分野
教授 西山 隆
准教授 山田克己
災害健康保健学研究分野
教授 高田 哲
准教授 小寺さやか
減災人間学研究分野
教授 松岡広路
減災社会システム研究分野
教授 金子由芳
国際減災マネジメント研究分野
客員教授 田和正裕
アジア減災マネジメント研究分野
客員教授 近藤共子



都市安全研究センター組織図
(平成 29年 3月 31日 現在)

3. 活動プロジェクト

リスク・アセスメント研究分野

地震発生メカニズムの解明と強震動・津波に関する研究

東海・東南海・南海地震の固着域の推定

3次元熱対流プレート沈み込みモデルの構築

ダイナミックな断層破壊モデルの構築

津波の数値シミュレーション研究

SSEと群発地震の連動メカニズムの解明

東北日本弧を対象とした観測された強震動データの特徴と震源特性・島弧の構造との関連性の研究

持続可能な減災社会インフラ構築のための地盤安全環境評価手法の確立

液状化などの地盤の動的挙動を表現できる地盤材料構成モデルの高度化

広域地盤モデル作成のための地盤物性の把握と入力パラメータの決定法の開発

深海底サンプリングにおける応力変化が土供試体の力学特性に及ぼす影響の定量的評価手法の開発

プレート境界デコルマ帯における変質に伴う力学特性変化の定量化モデルの開発とアスペリティー形成の可能性の検討

デコルマ帯に見られるモンモリロナイト含有粘性土の力学特性の把握とその構成モデル化

放射性廃棄物地層処分におけるモンモリロナイト含有粘性土（ベントナイト材料）の力学特性および変質に伴う力学特性変化の数理モデルの開発

リスク・マネジメント研究分野

社会基盤施設の耐震設計法の合理化に関する研究

社会基盤施設の設計地震動の合理化に関する研究

サイト増幅特性の評価法の開発

社会基盤施設の耐震性能照査法の合理化に関する研究

減災エリア・マネジメントによる安全安心コミュニティ構築に関する研究

津波浸水地域及び木造密集地域における減災エリアマネジメントに関する研究

人口集中都心における減災エリアマネジメントに関する研究

復興段階の被災地における減災エリアマネジメントに関する研究

アジアを中心とする発展途上国における減災エリアマネジメントに関する研究

リスク・コミュニケーション研究分野

健常者・障がい者に対するユニバーサルな災害情報収集及び提供システムの研究

人の視線，3次元姿勢推定による状況認識に関する研究

情報検索/音声質問検索に関する研究

健常者・構音障がい者の音声認識に関する研究

一般物体認識に関する研究

予測の不確実性を含んだ水災害軽減に関する基礎および実践的研究

京コンピュータを利用した平成25年台風第18号時の淀川全流域の流出再現研究

豪雨災害の探知・予測システムの検討に関する研究

気候システムに関する研究
住民へのリスク・コミュニケーションに関する研究

新型インフルエンザなど新興・再興感染症対策に関する研究
新興・再興感染症・新型インフルエンザに関する研究
耐性菌感染症に関する研究

4. 都市安全研究センターの運営

4.1 運営委員会

4.1.1 運営委員会構成

(平成28年5月1日現在)

センター長	教授	大石	哲	(都市安全研究センター)
副センター長	教授	長尾	毅	(都市安全研究センター)
	教授	飯塚	敦	(都市安全研究センター)
	教授	岩田	健太郎	(都市安全研究センター)
	教授	北後	明彦	(都市安全研究センター)
	教授	吉岡	祥一	(都市安全研究センター)
	教授	喜多	伸一	(人文学研究科)
	教授	貞好	康志	(国際文化学研究科)
	教授	松岡	広路	(人間発達環境学研究科)
	教授	大内	伸哉	(法学研究科)
	准教授	堀江	進也	(経済学研究科)
	准教授	三古	展弘	(経営学研究科)
	教授	島	信和	(理学研究科)
	教授	上野	易弘	(医学研究科)
	准教授	小寺	さやか	(保健学研究科)
	教授	井料	隆雅	(工学研究科)
	教授	吉本	雅彦	(システム情報学研究科)
	准教授	井上	一哉	(農学研究科)
	教授	小谷	通泰	(海事科学研究科)
	教授	金子	由芳	(国際協力研究科)
	教授	西谷	公孝	(経済経営研究所)
	教授	西村	義博	(医学部附属病院)
	客員教授	近藤	共子	(都市安全研究センター)
	客員教授	田和	正裕	(都市安全研究センター)

(以上 24名)

4.1.2 運営委員会開催状況

非公開

4.2 プロジェクト推進・評価

4.2.1 プロジェクト推進・評価委員会構成

後藤範三氏：神戸市危機管理監 理事
大久保博章氏：兵庫県防災監
松岡 健氏：神戸新聞社編集局文化部長
塩見彰浩氏：国際復興支援プラットフォーム上席復興専門官
中山伸一氏：兵庫県災害医療センターセンター長
平原和朗氏：京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻教授 (座長)
池淵周一氏：京都大学名誉教授 (公財) 河川財団近畿事務所 研究フェロー
太田秀樹氏：東京工業大学名誉教授 中央大学研究機構教授

4.2.2 プロジェクト推進・評価委員会開催状況

- 1) 日時：平成29年3月22日(木) 13:00～16:00
- 2) 場所：神戸大学都市安全研究センター研究棟2階会議室
- 3) 次第
 - (1) 開会挨拶(大石センター長)
 - (2) 委員自己紹介
 - (3) 座長選出
 - (4) 委員会の趣旨説明(大石センター長)
 - (5) 平成28年度のフィージビリティスタディの研究報告と平成29年度の研究計画
 - (6) 全体に関する質疑応答、コメント
 - (7) 次年度以降のセンター組織・大学の組織変更等について紹介及び次年度以降のプロジェクトの説明(大石センター長)
 - (8) 閉会挨拶(長尾副センター長)

5. 協力教員による活動

5.1 協力教員構成

(平成28年6月1日現在)

理事 (2名)	水谷 文俊 内田 一徳	
人文学研究科 (3名)		
教授	松田 毅	(文化構造専攻)
教授	奥村 弘	(社会動態専攻)
教授	市澤 哲	(社会動態専攻)
国際文化学研究科 (7名)		
教授	大月 一弘	(グローバル文化専攻)
教授	藤野 一夫	(グローバル文化専攻)
教授	王 柯	(文化相関専攻)
教授	坂本 千代	(文化相関専攻)
教授	塚原 東吾	(文化相関専攻)
准教授	井上 弘貴	(文化相関専攻)
准教授	安岡 正晴	(文化相関専攻)
人間発達環境学研究科 (6名)		
准教授	齊藤 誠一	(人間発達専攻)
教授	浅野 慎一	(人間環境学専攻)
教授	平山 洋介	(人間環境学専攻)
教授	山崎 健	(人間環境学専攻)
教授	澤 宗則	(人間環境学専攻)
准教授	太田 和宏	(人間環境学専攻)
法学研究科 (1名)		
教授	樫村 志郎	(理論法学専攻)
経済学研究科 (2名)		
教授	玉岡 雅之	(経済学専攻)
准教授	堀江 進也	
経営学研究科 (1名)		
教授	正司 健一	(経営学専攻)
理学研究科 (1名)		
助教	笥 楽磨	(地球惑星科学専攻)
医学研究科 (1名)		
教授	上野 易弘	(医科学専攻)
保健学研究科 (2名)		
教授	林 祥剛	(保健学専攻)
教授	中澤 港	(保健学専攻)

工学研究科 (35 名)

教授	黒田 龍二	(建築学専攻)
教授	阪上 公博	(建築学専攻)
教授	孫 玉平	(建築学専攻)
教授	多賀 謙蔵	(建築学専攻)
教授	田中 剛	(建築学専攻)
教授	谷 明勲	(建築学専攻)
教授	藤谷 秀雄	(建築学専攻)
教授	松下 敬幸	(建築学専攻)
教授	三輪 康一	(建築学専攻)
准教授	大谷 恭弘	(建築学専攻)
准教授	大西 一嘉	(建築学専攻)
准教授	近藤 民代	(建築学専攻)
准教授	佐藤 逸人	(建築学専攻)
准教授	竹林 英樹	(建築学専攻)
准教授	中江 研	(建築学専攻)
准教授	向井 洋一	(建築学専攻)
助教	栗山 尚子	(建築学専攻)
助教	竹内 崇	(建築学専攻)
教授	芥川 真一	(市民工学専攻)
教授	井料 隆雅	(市民工学専攻)
教授	小池 淳司	(市民工学専攻)
教授	澁谷 啓	(市民工学専攻)
教授	中山 恵介	(市民工学専攻)
教授	藤田 一郎	(市民工学専攻)
教授	森川 英典	(市民工学専攻)
准教授	加藤 正司	(市民工学専攻)
准教授	鋤田 泰子	(市民工学専攻)
助教	齋藤 雅彦	(市民工学専攻)
教授	竹野 裕正	(電気電子工学専攻)
教授	塚本 昌彦	(電気電子工学専攻)
助教	米森 秀登	(電気電子工学専攻)
教授	阪上 隆英	(機械工学専攻)
准教授	細川 茂雄	(機械工学専攻)
教授	大村 直人	(応用化学専攻)
准教授	今駒 博信	(応用化学専攻)

システム情報学研究科 (3名)

教授	上原 邦昭	(計算科学専攻)
教授	吉本 雅彦	(情報科学専攻)
助教	高木 由美	(情報科学専攻)

海事科学研究科 (3名)

教授	嶋田 博行	(海事マネジメント科学講座)
准教授	岡田 順子	(海事マネジメント科学講座)
教授	竹林 幹雄	(海洋ロジスティクス科学講座)

農学研究科 (8名)

教授	金子 治平	(食料共生システム学専攻)
教授	河端 俊典	(食料共生システム学専攻)

教授 高田 理 (食料共生システム学専攻)
教授 田中 勉 (食料共生システム学専攻)
教授 田中丸治哉 (食料共生システム学専攻)
准教授 井上 一哉 (食料共生システム学専攻)
准教授 多田 明夫 (食料共生システム学専攻)
助教 澤田 豊 (食料共生システム学専攻)

国際協力研究科 (3名)

教授 ALEXANDER RONNI BARR (国際協力政策専攻)
教授 小川 啓一 (地域協力政策専攻)
教授 金子 由芳 (地域協力政策専攻)

内海地域環境教育研究センター (1名)

教授 兵頭 政幸 (内海地域環境教育研究センター)

経済経営研究所 (1名)

教授 山地 秀俊 (企業情報研究部門)

国際連携推進機構 / 国際教育総合センター (3名)

教授 朴 鍾祐
准教授 HARRISON RICHARD JOH
准教授 黒田 千晴

イノベーション研究科 (1名)

教授 太田 能

(以上84名)

5.2 公募型プロジェクト

5.2.1 申請状況

応募総数 10 件

5.2.2 採択課題

小池淳司

熊本地震における経済被害の把握—直接被害，間接被害とサプライチェーン—

中澤 港

既婚女性を対象にした台風ハイエン復興期の現状と減災についての意識調査

中山恵介

河川津波遡上時における河岸との干渉による大振幅ソリトン波発生機構の解明

堀江進也

遠隔地の大地震が住民の主観的災害リスクに与える影響の考察

5.3 自然災害の現地調査研究公募

5.3.1 申請状況

応募総数 6 件

5.3.2 採択課題

近藤民代

規模が大きな余震が頻発する災害応急期における安全な居住環境確保の条件

金子由芳

熊本地震被災地の復興過程における私権の保全状況調査

北後明彦

2015 年ネパール地震後の住宅・地域再建支援と安全性向上の取組みに関する研究

6. 主な設備及び備品

リスク・アセスメント研究部門

- ・ボアホール3成分高感度地震観測装置 1式
- ・GPS (global positioning system) 受信装置 5式
- ・地震観測装置 3式
- ・サーボ加速度計 (JA-5VCA)
- ・アクセロアンプ (PA-1001-28C4)
- ・浸透実験用水槽
- ・小型間隙水圧計 (BPA-200 : 15本)
- ・埋設型土壌感圧水分・温度センサー (SK-5500ET : 4本),
- ・ADR水分センサー (SK-3200M : 6本),
- ・データロガー (UCAM-20PC : 1台)
- ・地盤環境モデリングソフト (GMS4.0)
- ・ガラス3面張り循環式開水路
- ・高解像度ビデオカメラ (KP-F100, 日立)
- ・洪水氾濫シミュレータ水路
- ・模型土槽
- ・三軸試験装置 2式
- ・不飽和土用三軸試験機 1台
- ・ライシメーター 3台 (CNK-NS10, クリマテック)
- ・ウェザーステーション (ウェザーバケット, Agriweather Inc.)
- ・スマート三軸試験機 1台 (応用地質株)

リスク・マネジメント研究部門

- ・中型一面せん断試験機 (共同利用可能)
- ・アルミ棒積層体模型載荷試験装置 (共同利用可能)
- ・赤外線サーモグラフィ TVS-700 1台 (利用可能)
- ・簡易無線機(黄)
- ・携帯式電源
- ・強震・微動計 1式
- ・微動センサー 2台

リスク・コミュニケーション研究部門

- ・反射法地震波探査装置 (DAS-1) (共同利用可能)
- ・電気探査装置 (McOHM-21) (共同利用可能)
- ・ボアホールカメラ (BPR-552型) (共同利用可能)
- ・地中レーダー探査装置 (SIR-2) (共同利用可能)
- ・電磁探査装置 (MAXMIN) (共同利用可能)
- ・重力探査装置 (CG-3) (共同利用可能)
- ・水質調査測定装置 (OCEAN SEVEN301) (共同利用可能)
- ・高圧圧密試験機 (二連型) (MARUI)
- ・万能圧縮試験機 (MARUI)
- ・光波測距儀 (TOPCON FC-3)
- ・電子セオドライト (SOKKIADT4F)
- ・ノンプリズムトータルステーション (Leica TCR405ultra)
- ・2周波GPS測量装置 (NetSurvG6)

各部門共通

- ・トヨタハイエース（CBF-TRH200V）1台

7. 野外調査・観測地及び緊急調査の実施

7.1 野外調査・観測地

リスク・アセスメント研究部門

- ・SKBエスポ岩盤研究所調査
- ・大源太ダム調査
- ・六ヶ所村放射性廃棄物地下空洞型処分施設閉鎖技術確証実験現場調査

リスク・マネジメント研究部門

- ・2016年熊本地震被害調査および常時微動観測
- ・鳥取県地震被害調査および常時微動観測
- ・堺泉北港常時微動観測
- ・2016年熊本地震後の火災調査
- ・2016年糸魚川大火の被害調査

リスク・コミュニケーション研究部門

- ・大阪湾周辺：Xバンドおよびミリ波レーダー，GPS 水蒸気探知，雷探知観測
- ・沖縄県恩納村：ビデオゾンデ観測
- ・富士山周辺：レーダーによる降雨調査，GNSS 水蒸気探知

7.2 緊急調査の実施

なし

8. 都市安全研究センター発行物

- ・第11回プロジェクト推進・評価諮問委員会報告書(平成28年7月)
- ・平成28年度神戸大学都市安全研究センター オープンセンター実施報告書(平成29年3月)
- ・平成28年度都市安全研究センター研究プロジェクト報告会「安全・安心な社会を目指して」報告書(災害対策セミナーin神戸)(平成29年3月)
- ・都市安全研究センター研究報告第21号(平成29年3月)
- ・都市安全研究センター活動報告第21号(平成29年3月)

9. 会議開催等

9.1 主催

オープンセンター（第16回）

神戸大学都市安全研究センター発 “みんなで考えよう 安全・安心で快適なまちづくり”
(神戸市役所共催)

平成28年11月27日(日)

場所：神戸ハーバーランド スペースシアター

概要： 11月27日(日)11:00～16:00に神戸市役所との共催で神戸ハーバーランドスペースシアターにて開催した。子供からお年寄りまで一般の市民の方が、“見て、聞いて、触れる”ことによって、大学の研究活動、防災について関心を持っていただく。ステージでは、神戸市都市計画総局による児童の「防災啓発ポスター」の表彰式、神戸市消防局ボランティアグループ「チームTEC安2」によるミニ講習会“あなたの勇気が命を救う～AEDと心肺蘇生法を体験しよう～”，神戸市住宅都市局の矢島氏によるミニ講演会“地震に自信ありますか-すまいの耐震化-”，センター教員の北後教授による“地震への備え-熊本地震からの教訓を生かす-”と題するミニ教室を行った。並行して、フロアでは12ブースに分かれて都市安全研究センターで行われている研究・調査活動、神戸市役所が取り組んでいる安全安心に係わる活動を紹介するパネルの展示、試験の実演や体験できるコーナーを設けた。

来訪者：約264名(橘)

第10回 災害対策セミナーin神戸 震災教訓の継承と自己決定力向上～熊本地震などの災害事例から学ぶ～

安全・安心な社会を目指して ー迫る自然災害の危険性とその対策ー

神戸大学都市安全研究センターの活動

日時： 平成29年 1月24日(火) 13:00～15:30

会場： 神戸国際会議場 504・505会議室

プログラム

- 13:00： 都市安全研究センターの組織と発展
大石 哲／都市安全研究センター・センター長
- 13:10： 都市安全研究センターの先端研究紹介1「2016年鳥取県中部地震の動的断層破壊モデルの構築」
吉岡 祥一／都市安全研究センター・教授
- 14:00： フロア・ディスカッション
- 14:10： 休憩
- 14:20： 都市安全研究センターの先端研究紹介2「地層処分における人工バリア緩衝材の長期挙動予測解析」
橘 伸也／都市安全研究センター・講師
- 15:10： フロア・ディスカッション
- 15:20： 閉会挨拶 大石 哲／都市安全研究センター・センター長

参加者：25名(廣瀬)

オープンゼミナール

第208回

日時：2016年4月16日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

司会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦

共催：神戸市消防局

後援：兵庫県

内容：

① 社会調査によって復興を「見える化」する

～兵庫県生活復興調査を端緒とする復興過程の解明

木村玲欧 兵庫県立大学環境人間学部／大学院環境人間学研究科准教授

阪神・淡路大震災は、巨大災害発生から時間経過に伴って変化する復興過程が初めて科学的に調査された災害だと言えます。無作為抽出調査を継続的に行うことで明らかになった復興過程と、新潟県中越地震・中越沖地震などで検証した復興過程の一般化の試みについて紹介があった。

② 住まいと生活再建ー人生の立て直しに向けて

平山洋介 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

住まいの再生は、生活再建の一環であるだけでなく、その基盤としての位置を占めている。平山先生たちの研究グループでは、釜石市の被災者を対象とし、その住宅事情に関するアンケート調査を5回にわたって実施してきました。その結果をもとに、住宅復興の論点が示された。参加者：54名（北後）

第209回

日時：2016年5月14日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

司会：神戸大学都市安全研究センター教授 吉岡祥一

共催：神戸市消防局

後援：兵庫県

内容：

① 海溝型巨大地震の予測の考え方と取り組みの現状

堀 高峰 海洋研究開発機構 地震津波海域観測研究開発センター

地震津波予測研究グループ グループリーダー

沈み込みプレート境界で発生する海溝型巨大地震の繰り返し発生は、岩石の摩擦法則にしたがうプレート境界面でのすべりの時空間変化としてモデル化でき、すべりの時空間変化は地表の地殻変動データからある程度推定することができる。本講演では、モデル化の考え方やその根拠となる観測事実とともに、このモデルと観測データにもとづいて、プレート境界面でのすべりの推移変化を予測したり、今後起こりうる地震発生のシナリオを検討するための枠組みとその適用例が紹介された。

② 内陸地震の発生過程の解明

飯尾 能久 京都大学防災研究所 教授

内陸地震は身近な現象にもかかわらず、数年前まではその基本的な発生の仕組みはほとんど分かっていませんでした。沈み込むプレートに押されて、日本列島の内陸に歪みがたまり内陸地震が発生すると思われていました。しかし、この考えでは、(1) プレート境界の大地震の発生間隔を超えて、内陸大地震の断層の歪みが増加できるのか？ (2) プレート境界に近いほど歪みは大きいはずなのに、プレート境界から遠く離れた地域で内陸大地震が多いのはなぜか？ ということは説明不可能でした。加えて、(3) 内陸大地震の再来間隔は、どうして数百年から数万年以上と大きくばらつくのか？ (4) 断層の端はどうなっているか？ 何が内陸大地震の大きさを決めるのか？ ということもよく分かっていない。最近、飯尾教授は、内陸大地震の断層の下側の下部地殻にあると推定される、断層の深部延長の働きに着目した内陸

地震の発生過程の新説「脆性-塑性相互作用モデル」を提唱されました。これにより、これまで説明が難しかった色々な観測事実を説明可能となりました。本講演では、この考え方をわかりやすく解説していただいた。

参加者：75名（北後）

第210回

日時：2016年6月18日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

司会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦

共催：神戸市消防局 ■後援：兵庫県

内容：

① 2015年ネパール地震後の住宅再建支援と安全性向上の取組

荒木裕子 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター主任研究員

仙台国連防災世界会議後初の大規模地震災害となったネパール・ゴルカ地震後、ネパール政府はBuild Back Better「よりよい復興」を掲げ住宅の耐震化を進めようとしている。行政による住宅再建、並びに安全性向上の取組とNPOの役割、実際の住民の住宅再建に向けた状況を報告していただいた。

② 2016年熊本地震の地震動・地盤震動と住宅被害

長尾 毅 神戸大学都市安全研究センター教授

2016年熊本地震は、益城町で震度7を2回観測するなど、各地を厳しい揺れが襲いました。本講演では、熊本地震による地震動は兵庫県南部地震などと比較するとどのような特徴があったのかを整理し、地盤条件による地震動の増幅特性の違いが住宅被害の程度の差にどのような影響を及ぼしたのかを考察した。さらに、今後の大地震による住宅被害を防ぐために、どのようなことを考慮していく必要があるのかについて分かりやすく述べていただいた。

③ 2016年熊本地震後に発生した火災に関する調査報告

北後明彦 神戸大学都市安全研究センター教授

熊本地震後に発生した火災は、合計で16件報告されている。そのうち、2016年4月14日の前震後に5件、4月16日の本震後11件の火災が、推定震度5弱以上（気象庁発表）の地域を中心に発生した。本報告では、現地調査でのヒアリング結果を中心に、各事例で火災となった経過や対応状況について見ていき、今後の教訓について考えた。なお、この調査は、日本火災学会地震火災専門委員会（主査：北後明彦）による調査の一環として行ったものである。

参加者：56名（北後）

第211回

日時：2016年7月16日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

司会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦

共催：神戸市消防局

後援：兵庫県

内容：

① 極端水害に備えるために－洪水シミュレーションの活用事例－

小林健一郎 神戸大学都市安全研究センター准教授

本研究ではさまざまな洪水シミュレーションについて紹介する。京コンピュータを使った計算事例から、淀川流域や都賀川流域での最悪台風による洪水予測、南海トラフを想定した沿岸域のシミュレーションや、その際の避難行動について検討した事例などを示した。これらの計算手法は、地域における洪水対策の検討に役立てることを目的に開発している。

② 避難計画問題のための数理的技術

瀧澤重志 大阪市立大学工学研究科准教授

防災分野でのICTの高度な利活用を図るため、特に避難計画問題に対する数理的な基盤技術の開発や計算を行っている。それらの中から、梅田地下街の垂直避難シミュレーション、最速

フローモデルによる津波浸水域からの最速避難、避難場所の地域割りあてパタンの全列挙手法等について紹介した。

参加者：52名（北後）

第212回

日時：2016年8月20日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

司会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦

共催：神戸市消防局

後援：兵庫県

内容：

① 常総水害時の情報と住民避難—災害の教訓をどう活かしていくか—

伊藤哲司 茨城大学人文学部教授・地球変動適応科学研究機関長

2015年9月10日に発生した関東・東北豪雨で、茨城県常総市では鬼怒川が氾濫し大水害をもたらした。この水害で、2人が犠牲になり、多くの家屋が甚大な被害を受けた。もっとも大きな決壊場所となった上三坂地区には、市の防災対策本部から避難指示が出ないという重大なミスも起こっていた。防災無線の放送は音声が反響して明瞭に聞き取れず、内容的にも的確な避難行動を促す指示が出されなかったという問題もある。そもそも歴史的には水害が繰り返されてきた地域であるにもかかわらず、限定的な規模に留まった過去の水害から、自分のところには水はこないと思った住民が多かった。今回の水害から私たちは何を学べるのか、そしてそれを広義の防災教育にどう活かしていけるのかを考えた。

② 河川監視カメラやドローンを利用した洪水流計測の新展開

藤田一郎 神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻教授

昨年度の鬼怒川破堤氾濫に例を見るまでもなく、我が国の河川災害は毎年のように発生している。このような河川災害に対する計画を策定するためには、正確な河川流量の取得が降雨量の把握とともに重要であるが、降雨分布の計測が様々なレーダー技術の発展に伴って高精度化してきたのに対し、流量の計測は未だに浮子観測というアナログ的手法で行われているのが現状である。これに対し、河川沿いに多数設置してある河川カメラやドローンで撮影された河川映像を用い、画像解析によって河川表面流速分布を求めた上で間接的に流量推定を行う手法を長年、研究してきた内容について紹介した。

参加者：46名（北後）

第213回

日時：2016年9月17日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

司会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦

共催：神戸市消防局

後援：兵庫県

内容：

① 欧州・地中海地域における地震ハザード～最近の事例と取り組み～

青地 秀雄 フランス地質調査所シニア研究員・プロジェクトリーダー
神戸大学都市安全研究センター客員教授

2009年ラクイラ地震、2012年エミリア・ロマーニャ地震（ともにイタリア）など欧州・地中海地域においても被害地震は起こりうる。21世紀に入って、国際的な地震ハザード情報の共有を目的に、観測網整備、基礎データ、ハザード評価の統一化、地震即時情報などが欧州研究プロジェクトの一環として格段に進歩してきた。地域内では、トルコ・イスタンブール付近が1999年イズミット地震以降、最も危険視されている。本報告では、特に大規模計算に基づいた地震シナリオの確率的導出について紹介した。

② 平成28年熊本地震の踏査報告

沖村 孝 神戸大学名誉教授 一般財団法人建設工学研究所代表理事

平成28年4月14日夜と16日未明とともに震度7で発生した熊本地震による被災を、7月4日から6日にかけて踏査した結果を報告した。その対象は、阿蘇カルデラで出現した陥没、阿蘇大橋を破壊した大規模崩壊、布田川断層活動による断層変位、益城町内の木造家屋の倒壊、熊本市南区の液状化被災である。直接の原因は、二度にわたる震度7の出現、約2m変位した右横ずれの布田川断層活動であるが、被害の特徴は火山性堆積域、低位段丘域、沖積堆積域に起因する地盤変位と強震動による災害であったように思えた。

参加者：41名（北後）

第214回

日時：2016年10月15日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

司会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦

共催：神戸市消防局

後援：兵庫県

内容：

① 南海トラフ巨大地震による大阪湾での津波マリンハザード

林 美鶴 神戸大学内海域環境教育研究センター・大学院海事科学研究科准教授

近代化以降に初めて起こる南海トラフ巨大地震による津波は、都市部に隣接する大阪湾にどのような災害をもたらすのか？津波によって海で起こり得る危険事象を「津波マリンハザード」と定義し、海上輸送と海洋環境に関する津波マリンハザードについての研究成果を紹介した。前者は重要なライフラインの一つであり、後者は水産業のみならず多方面で長期的に影響を残す可能性がある。いずれも人命に直接関わらないため検討が遅れがちだが、早期復興にとっては重要な課題である。

② 建材からのアスベスト飛散リスクとその対応

山本 信一 三田市防災インストラクター

「命を刻むミクロの針」「キラダスト」「静かな時限爆弾」と言われるアスベストについて、消防隊員の安全の確保のために、消防活動に伴うアスベストの飛散による消防隊員へのリスクについて考察した。考察の結果、提案する対応方法として、①地震、火災などの災害時のアスベスト飛散防止策を地域防災計画で規定する ②消防隊員自らが、アスベストの有害性を知識として共有する ③管内のアスベスト使用（未使用、未調査も含む）建築物を把握する ④アスベスト含浸固化剤を活用して無害化を図る ⑤個人装備として、防塵マスクを活用する ⑥その他、について示した。

参加者：48名（北後）

第215回

日時：2016年11月19日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

開場13時30分～ 先着順受付（無料、定員60名）

神戸市中央区江戸町97-1 Tel. 078-322-5740

<http://open.kobe-u.rcuss-usm.jp/p/access.html>

司会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦

共催：神戸市危機管理室、神戸市消防局、神戸大学地域連携推進室

後援：兵庫県

内容：

① 米国ハリケーンカトリーナ災害における居住環境の再生

ーカトリーナ災害（2005）と東日本大震災（2011）の比較を通してー

近藤 民代 神戸大学大学院工学研究科准教授・都市安全研究センター特別研究員

米国ハリケーンカトリーナ災害から11年が経過した。最大の被災地ニューオーリンズ市では復興の手段として市街地整備事業は行われていない。これは東日本大震災とは対照的である。そこで展開されているのは現地再建を断念した被災者の住宅所有権を第三者に移管する不動産

オークションや、隣家に隣地を買い取ってもらうことを促す公的プログラムである。居住環境再生を牽引する力は市街地整備事業や公的介入だけではないはずである。両災害の被災市街地において報告者が継続的に行っているフィールド調査に基づいて居住環境の再生のプランニング技術や政策のあり方について考察した。

② 戦後日本の公害経験から福島の復興を考える

除本 理史 大阪市立大学大学院経営学研究科教授

東京電力福島第一原子力発電所の事故から5年以上が経過した今になっても、被災地の復興が進んでいないのはなぜか。生命や健康だけでなく地域の生活環境やコミュニティの喪失を伴う被害の実情には、原発事故特有の問題とともに、これまでの公害問題との共通性がみられる。公害の被害回復と地域再生の教訓を踏まえ、現在の復興政策の問題点を考察した。

参加者：34名（北後）

第216回

日時：2016年12月17日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

司会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦

共催：神戸市危機管理室、神戸市消防局、神戸大学地域連携推進室

後援：兵庫県

内容：

① 震災復興における女性の活動の課題と可能性

堀久美 岩手大学男女共同参画推進室准教授

東日本大震災により、被災地の女性たちは多くの困難に直面している。しかし彼女たちは、被災者支援や復興の重要な担い手でもある。震災復興をめざして活動する被災地の女性たちへのインタビュー調査の結果をふまえ、ジェンダー格差のない復興実現の可能性について報告した。

② 多様性を受容できる震災復興をめざして—東北大震災被災地の実情をふまえて—

岡田順子 神戸大学大学院海事科学研究科准教授

中原朝子 神戸大学男女共同参画推進室特命助教

神戸大学では、東北大震災被災地に対し、さまざまな研究・調査を行っている。その中で、本研究チームは、被災地の自立的復興を中心課題として、その支援活動を行い、5年目にあたる今年生活状況、復興のあり方等についての意識調査を行った。本報告では、その調査をもとに被災した住民の現在の生活状況、復興に対する意識などを男女別、年齢別に分析し、自立復興を支援するための今後の活動について考察した。なお、考察にあたっては、ジェンダーの観点から災害を考える国際的なガイドラインを基本概念として参照した。（本報告は、神戸大学「ジェンダー・エスニシティ・多世代共生に着目した震災復興と減災方策に関する研究（課題番号科学研究費萌芽研究26570019、代表：朴木佳緒留）」の調査に基づいている。）

③ 熊本地震における被災者支援策について

山崎栄一 関西大学社会安全学部教授

熊本地震においてどのような被災者支援策が施されているのかについて概観したのち、東日本大震災の教訓をどこまで生かすことが出来ているのかについて、東日本大震災後に大幅改正された災害対策基本法を踏まえながら、吟味をした。具体的には、災害救助法の運用、被災者生活再建支援法の限界、自治体の独自施策、被災者の個人情報、災害関連死の予防・判定、一時的な疎開（広域避難）の可能性、復興基金のあり方、などについて言及した。

参加者：41名（北後）

第217回

日時：2017年1月21日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

開場13時30分～ 先着順受付（無料、定員60名）

神戸市中央区江戸町97-1 Tel. 078-322-5740

<http://open.kobe-u.rcuss-usm.jp/p/access.html>

司 会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦
共 催：神戸市危機管理室、神戸市消防局、神戸大学地域連携推進室
後 援：兵庫県
内 容：

① 活断層と「震災の帯」－熊本地震、阪神・淡路大震災等から考える－

鈴木康弘 名古屋大学減災連携研究センター教授

阪神・淡路大震災から21年後に起きた熊本地震は、活断層による地震の脅威を再認識させるとともに、直下型地震対策の課題を明らかにした。震度7の強い揺れによって「震災の帯」が再現し、そこでは現行の耐震基準も十分ではなかった。「強い揺れはどこでも起きる」という防災啓発がミスリードであったかもしれない。「震災の帯」の成因は様々に議論されるが、今なお知識の限界がある。近年発生した地震を例に、活断層研究の立場から「震災の帯」について再検討した。

② 2015年ネパール・ゴルカ地震による歴史的市街地の被害と復興、

ならびに2016年熊本地震における木造建築被害の概要

向井洋一 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻准教授

2015年ネパール・ゴルカ地震により甚大な被害を受けた旧都バクタプルにおいて実施した歴史的煉瓦造建築物の被害状況と、震災後1年後の復興状況についての調査結果の概要を報告するとともに、2016年熊本地震において実施した建物被害調査に基づき、木造建築物に見られる被害の特徴の概要について報告した。

参加者：53名（北後）

第218回

日 時：2017年2月4日（土）14時～17時
場 所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室
司 会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦
共 催：神戸市危機管理室、神戸市消防局、神戸大学地域連携推進室
後 援：兵庫県
内 容：

① 仮設住宅からはじまった復興コミュニティデザイン

－仙台・あすと長町での取り組みから熊本・益城町へ－

新井信幸 東北工業大学工学部建築学科准教授

東日本大震災の復興過程では、過去の教訓から、被災前の地域コミュニティの維持を重視する対応がみられてきたが、仮設住宅団地においては被災前の地域コミュニティが維持されていないところも多くみられた。このようなコミュニティ非継続型の仮設住宅団地では、むしろ新たにコミュニティを創出することが求められるが、「あすと長町仮設住宅」では、多様な外部からの支援を受けながら、居住者同士で高齢者等の暮らしをサポートする関係を育んでおり、さらに災害公営住宅への移行に向けてコミュニティを維持する取り組みを展開してきた。本報告では、このような取り組みを「復興コミュニティデザイン」と称し、成否のポイントなどについて振り返りつつ、新たな被災地での取り組みについて検討した。

② 防災集団移転事業を活用した小集団住宅自主移転再建

－気仙沼での5年間の支援調査活動から－

市古太郎 首都大学東京 都市システム科学域准教授

災害からの住宅再建では「個別－集団」および「現地－移転」パターン（インド洋大津波からの住まい再建研究（たとえば牧ら）参照）が知られており「選択肢を増やす」という意味からも被災者のニーズにマッチしうるものと思われます。東日本大震災では加えて「自力」と「自主」という意味提起がなされてきた（近藤・柄谷「個別自主再建に関する研究」参照）。では「集団」かつ「移転」かつ「自主」は成り立ちうるのか？首都大学市古研究室で調査支援に取り組んできた気仙沼市階上地区のケースを元に考えました。特に防災集団移転事業が、住宅再建者の自主性・主体性を後押しする制度になっているか？多様な視点からのディスカッション

がなされた。

参加者：56名（北後）

第219回

日時：2017年3月18日（土）14時～17時

場所：神戸市役所4号館（危機管理センター）1階会議室

司会：神戸大学都市安全研究センター教授 北後明彦

共催：神戸市危機管理室、神戸市消防局、神戸大学地域連携推進室

後援：兵庫県

内容：

①雨雲内部のあられの体積量推定技術の開発による豪雨予測の可能性について

－気象レーダー及び直接粒子観測機器を利用した氷粒子観測を通じて－

小川まり子 神戸大学 地域連携推進室特命助教

2008年都賀川水難事故では局地的な集中豪雨により10分間で1.34mの水位が上昇し、5名の方が亡くなられた。大雨・洪水注意報及び警報の発表に連動した回転灯を伴う増水警報システムが表六甲河川を中心に導入されたが、都賀川水難事故をもたらした局所的に突然発生・発達するような積乱雲に対しては現象そのものの予想が難しいとされ、多くの専門家によって研究がなされてきた（例えば中北ら「ドップラー風速を用いたゲリラ豪雨のタマゴの危険性予知に関する研究」参照）。本報告では、上空のあられを含む氷粒子の分布や体積量を、直接粒子観測機器と気象レーダーを用いて推定し、雲内部の潜在的な雨量を予測しようとする取り組みについて紹介し、住民の適切な避難行動を促すための豪雨の危険性把握の可能性について示された。

②地震直後のマンションにおける生活継続力の向上

－評価手法の活用による改善提案事例を通じて－

村田明子 清水建設株式会社 技術研究所社会システム技術センター

まちづくりグループ グループ長

大地震が発生した際、大都市では人口に対する避難所数が限られるため、多くの自治体でマンションでの生活継続が求められるようになってきた。マンションでは大地震等の災害の際に給排水や電力、情報通信といったライフラインが停止する場合があります、そこで生活を継続するには多くの困難が伴うことが考えられるので、様々な備えを行って、生活継続力の向上をはかっておく必要がある。管理組合や自治会、自主防災組織等による日頃からの運営体制（＝ソフト）ができていることがマンションでの生活継続にとって重要であり、そうした観点を含めハード・ソフトの両面を評価する手法を考案した。本報告では、この評価法とマンションでの改善提案事例について紹介があった。

参加者：48名（北後）

9.2 共催

5th. Korea-Japan International Seminar on Urban Disaster Prevention and Mitigation

日時：平成28年8月19日（金）、20日（土）

場所：韓国・朝鮮大学校

参加者：30名（藤永）

9.3 中高生への説明会

広島大学附属高校スーパーサイエンスハイスクール サイエンスツアー研修

日時：平成28年9月16日

場所：神戸大学工学研究科

内容：

A班：岩田 健太郎

内容：「感染症に関するワークショップ」

B班：長尾 毅

内容：「地震の揺れについて考えてみよう」

C班：廣瀬 仁

内容：「GPS測位の原理と測定精度の調査」

D班：滝口哲也

内容：「機械で声質を変える—聴き取りやすい声で、豊かな生活をかなえる」

参加者：38名（大石）

9.4 その他

JICA 受託研修「アフリカ地域総合防災対策

Comprehensive disaster risk reduction and management in the African region」

日時：平成28年9月25日～平成28年10月29日

場所：神戸大学他

内容：アフリカ各国（カーボベルデ、ケニア、モーリシャス、アルジェリア）からの参加者に対し、防災対策の各国に合わせた対策を考えてもらい、アクションプランを作成していただいた。

参加者：11名（大石）

研究集会「Joint Workshop on Slow Earthquakes 2016」

日程：平成28年9月13日～9月15日

場所：東京大学地震研究所1号館セミナー室

内容：東京大学地震研究所・京都大学防災研究所の共同利用研究集会・新学術領域「スロー地震学」の合同で、スロー地震に関する国際研究集会を開催した。152名の参加者のうち外国人参加者が24名であった。

参加者：152名（廣瀬）

1 1. 国際・国内交流活動

フィリピン大学政策学部Study Trip受入れ

平成28年11月16日，神戸大学都市安全研究センター 2階会議室

概要：Advancement on early warning system for typhoon and other weather-related disasters, Advancement on DRR for earthquake and other geological disasters, Comparison between disaster management governance in Japan and the Philippines, 及び, RCUSS / Kobe University's research on Typhoon Haiyan/Yolanda and other disasters in the Philippinesについて講演を行い、討議を行った。

主催代表者：北後明彦

Workshop on activities in Bentonite re-asturation Project

平成29年1月19日-20日，神戸大学統合研究拠点

概要：地層処分施設におけるベントナイト緩衝材の再冠水挙動に関する国際ワークショップを主催。海外からはスウェーデンの地層処分実施主体であるSKB社，国内からは原子力環境整備促進機構・資金管理センターRQMCなど複数の機関・企業から計24名が参加した。

主催代表者：橘伸也

13. 研究費

13.1 科学研究費

研究題目：深海底デコルマ帯の固着域形成と破壊すべりの弾塑性理論

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究者：飯塚敦

代表/分担：代表

受入金額：2,210千円

研究題目：脳性麻痺障がい者の意図認識によるユニバーサルコミュニケーション支援機器の開発

研究種目：基盤研究 (B)

研究者：滝口哲也

代表/分担：代表

受入金額：3,770千円

研究題目：地震動のサイト増幅特性の面的評価法に関する研究

研究種目：基盤研究 (C)

研究者：長尾 毅

代表/分担：代表

受入金額：600千円

研究題目：日本下のプレート沈み込みとマントルウェッジの温度場・水輸送・異方性のダイナミクス

研究種目：基盤研究 (B)

研究者：吉岡祥一

代表/分担：代表

受入金額：5,900千円

研究題目：東北地方太平洋沖地震の地震前・地震時・地震後の固着状態とすべり分布の推定

研究種目：新学術領域研究

研究者：吉岡祥一

代表/分担：代表 (公募研究)

受入金額：2,700千円

研究題目：低速変形から高速すべりまでの地球科学的モデル構築

研究種目：新学術領域研究

研究者：吉岡祥一 (分担)

受入金額：4,200千円

研究題目：測地観測によるスロー地震の物理像の解明

研究種目：新学術領域研究 (研究領域提案型) 「スロー地震学」計画研究

研究者：廣瀬仁

代表/分担：代表

受入金額：47,100千円

研究題目：スロー地震学

研究種目：新学術領域研究 (研究領域提案型) 「スロー地震学」総括班

研究者：廣瀬仁

代表/分担：分担

受入金額：100千円

研究題目：スロー地震学の国際展開

研究種目：新学術領域研究（研究領域提案型）「スロー地震学」国際活動支援班

研究者：廣瀬仁

代表／分担：分担

受入金額：100千円

研究題目：地殻変動と地震活動に基づくスロースリップイベント像の解明

研究種目：基盤研究(C)

研究者：廣瀬仁

代表／分担：代表

受入金額：700千円

研究題目：高分解能土砂災害警戒情報の確率的指標作成と活用に関する研究

研究種目：基盤研究(B)

研究者：大石哲

代表／分担：代表

受け入れ金額：2,340千円

研究題目：レーダーと電場数値モデルからなる火山雷ハイブリッドモデルの開発に関する研究

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究者：大石哲

代表／分担：代表

受け入れ金額：1,820千円

研究題目：最新型偏波レーダーとビデオゾンデの同期集中観測と水災害軽減に向けた総合的基礎研究

研究種目：基盤研究(S)

研究者：大石哲

代表／分担：分担

受け入れ金額：2,000千円

研究題目：高分解能土砂災害警戒情報の確率的指標作成と活用に関する研究

研究種目：基盤研究(B)

研究者：小林健一郎

代表／分担：分担

受け入れ金額：300千円

14. 教育活動

14.1 講義科目

工学部

- (飯塚) 市民工学倫理 (分担), 土質力学Ⅱ及び演習 (分担), 連続体力学, 国際関係論 (分担), 地盤基礎工学 (分担)
- (北後) 地域安全論 (分担), まちづくり論 (分担), 建築計画A, 設計演習 (分担), 計画演習 (分担), 建築演習 (分担)
- (長尾) 構造力学Ⅰ, 構造動力学 (分担), 市民工学概論 (分担), 創造思考ゼミナールⅡ (分担)
- (大石) 水文学 (分担), 市民工学概論 (分担), 初年次セミナー (分担), 市民工学倫理 (分担)
- (橘) 実験及び安全指導 (分担), 創造思考ゼミナールⅠ (分担), 土質力学Ⅱ及び演習 (分担)
- (藤永) 構造設計Ⅱ (分担)
- (滝口) デジタル信号処理, 信号解析, 情報知能工学演習 (分担)
- (小林) 水文学 (分担), 実験及び安全指導 (分担), 創造思考ゼミナールⅠ (分担), 水工学の基礎及び演習

理学部

- (吉岡) 固体地球物理学Ⅰ (分担), 惑星学基礎Ⅱ-a, b, 実習A (分担)
- (廣瀬) 初年次セミナー (分担), 惑星学基礎Ⅰ-1, 固体地球物理学Ⅰ (分担), 固体地球科学 (分担), 地球惑星科学実習A (分担)

医学部

- (岩田)
医学科：卒後臨床研修医指導 (感染症内科), 学部生チュートリアル(4年次), 学部生BSL(5年次, 6年次), 感染症後期研修 (感染症内科)、微生物学講義 (3年次)
- (大路)
医学科：卒後臨床研修医指導(感染症内科), 学部生チュートリアル(全科), 学部生 BSL(5年次, 6年次), 臨床検査医学実習 (分担)、「多職種協働」による実践(IPW: Inter-Professional Work)実習 (分担)
保健学研究科：感染症特講 (分担)、国際保健学 (分担)

全学共通授業科目

- (吉岡) 教養原論「阪神・淡路大震災」(分担), 教養原論「地球と惑星」(分担)
- (北後) 総合教養科目「阪神・淡路大震災」(分担)
教養原論「ものづくりと科学技術」(分担)
- (岩田) 総合教養科目「阪神・淡路大震災」(分担)
- (廣瀬) 基礎教養科目「惑星学C」(分担)
- (長尾) 総合教養科目「阪神・淡路大震災」(分担)
総合教養科目「資源・材料とエネルギー」(分担)
- (小林) 総合教養科目「資源・材料とエネルギー」(分担)
「神戸大学の研究最前線B」(分担)

大学院工学研究科博士課程前期課程

- (飯塚) 固体計算力学 I (分担), 固体計算力学 II (分担), 固体計算力学 III (分担), 地盤基礎工学特論, 先端融合科学特論 (分担)
- (北後) 避難計画特論 A・B
- (長尾) 地震工学特論 I
- (大石) 流域システム
- (橘) 地盤基礎工学特論
- (藤永) 構造解析学
- (小林) 特別講義VI, 土木技術英語 (分担)

大学院システム情報学研究科

- (滝口) ヒューマンコンピュータインタラクション論

大学院理学研究科博士課程前期課程

- (吉岡) 惑星学要論 (分担)
- (廣瀬) 惑星学通論 1 (分担), 惑星学通論 2 (分担), 惑星学通論 3 (分担), 惑星学通論 4 (分担), 先端融合科学特論 (分担)

大学院理学研究科博士課程後期課程

- (吉岡) 惑星学要論 (分担)
- (廣瀬) 惑星学特論 1 (分担), 惑星学特論 2 (分担), 惑星学特論 3 (分担), 惑星学特論 4 (分担), 先端融合科学特論 (分担)

大学院国際協力研究科博士課程前期課程

- (北後) 国際防災論、国際防災論演習、Disaster Risk Management

大学院工学研究科博士課程後期課程

- (飯塚) 地下構造解析学 (分担), 先端融合科学特論 (分担)
- (北後) 建築都市安全計画学
- (長尾) 地震防災工学
- (大石) 水資源計画
- (橘) 担当なし

(藤永) 空間骨組構成論
(小林) 水理計画論

大学院システム情報学研究科博士課程後期課程

(滝口) 知能情報特論

15. 研究業績

15.1 研究現状の紹介（研究テーマ）

リスク・アセスメント研究部門

地盤環境リスク評価研究分野

主な研究テーマ：持続可能な減災社会インフラ構築のための地盤安全環境評価手法の確立

- ・液状化などの地盤の動的挙動を表現できる地盤材料構成モデルの高度化
- ・広域地盤モデル作成のための地盤物性の把握と入力パラメータの決定法の開発
- ・深海底サンプリングにおける応力変化が土供試体の力学特性に及ぼす影響の定量的評価手法の開発
- ・プレート境界デコルマ帯における変質に伴う力学特性変化の定量化モデルの開発とアスペリティー形成の可能性の検討
- ・デコルマ帯に見られるモンモリロナイト含有粘性土の力学特性の把握とその構成モデル化
- ・放射性廃棄物地層処分におけるモンモリロナイト含有粘性土（ベントナイト材料）の力学特性および変質に伴う力学特性変化の数理モデルの開発

地震災害リスク評価研究分野

主な研究テーマ：東海・東南海・南海地震の固着域の推定
プレートの沈み込みに伴う温度分布の推定
SSEと群発地震の連動メカニズムの解明
強震動の性質と発生メカニズム
震源過程
地震発生論
地震破壊の進展メカニズムに関する数値解析
断層のすべりの生成機構に関する研究
三次元地震波動・津波・破壊の数値シミュレーション

リスク・マネジメント研究部門

社会基盤マネジメント研究分野

主な研究テーマ：地震動の増幅特性の評価法に関する研究
構造物の設計地震動に関する研究
被害地震の地震動評価に関する研究
構造物の耐震性能照査法に関する研究
構造物の耐震信頼性評価に関する研究
杭・地盤相互作用評価に関する研究

減災エリアマネジメント研究分野

主な研究テーマ：都市・地域における安全計画に関する研究
災害時の都市復興計画に関する研究
建築における防火避難計画に関する研究
災害時要援護者の避難安全対策に関する研究
既存不適格建築物の耐震補強に関する研究
被災構造物の補修・補強に関する研究
鋼・コンクリート合成構造に関する研究

リスク・コミュニケーション研究部門

情報コミュニケーション研究分野

主な研究テーマ：マルチメディア処理の研究

機械学習に関する研究

画像処理・認識の研究

音声認識・音響情報処理の研究

マンマシーン・コミュニケーションに関する研究

障がい者インターフェースに関する研究

安全コミュニケーション研究分野

主な研究テーマ：リスクコミュニケーションツールとしてのハザードマップの活用方法

次世代型偏波レーダーによる降水量推定・降水予測の高精度化と水管理へのインパクト評価

小規模貯留施設制御による小河川の流出抑制と災害時水資源確保のための基礎的研究

短時間降雨予測の不確実情報を用いた住民へのリスクコミュニケーションに関する研究

次世代型洪水流出・氾濫モデルの開発

洪水時の避難行動モデルの開発

感染症リスク・コミュニケーション研究分野

主な研究テーマ：都市安全の公衆衛生的分析

災害対応の医療情報システム

医療技術のリスクと評価

リスク下での医学意思決定

TBLの研究

指導医講習会のあり方に関する研究

腸管スピロヘータ症の研究

ライム病の研究

東日本大震災と感染症に関する研究

パンデミックインフルエンザに関する研究

災害ボランティアにおける安全衛生

MRSA腸炎の存在証明に関する研究

アニサキス症予防のための魚介類冷凍の味覚に関する研究

結核喀痰塗抹採取時間に関する研究

感染症後期研修の質に関する研究

15.2 著 書

(大石)

Sustainable Water Resources Planning and Management Under Climate Change

Kolokytha, Elpida, Oishi, Satoru, Teegavarapu, Ramesh S.V. (Eds.), Springer ISBN 978-981-10-2051-3

(長尾)

土木構造物共通示方書 (性能・作用編), 2016年制定版 (分担執筆), 土木学会, 2016年

(北後)

A Comparative Approach to the Post-2001 Gujarat Earthquake Recovery in India

Akihiko Hokugo, *Asian Law in Disasters Toward a Human-Centered Recovery*, Edited by Yuka KANEKO, Katsumi MATSUOKA, Toshihisa TOYODA, Routledge, pp.291-299, 2016.

15.3 学術論文

(飯塚)

放射性廃棄物の地下空洞型物処分施設に用いる側部低透水層の転圧工法による施工品質の評価, 山田淳夫, 千々松正和, 秋山吉弘, 小峯秀雄, 飯塚敦, 土木学会論文集 C (地圏工学), Vol.72, No.2, pp.164-178, 2016

Explanation of Dry Density Distribution Induced by Compaction through Soil/Water/Air Coupled Simulation, Kawai,K. , Phommachanh,V., Kawakatsu,T. and Iizuka,A., *Procedia*

Engineering, Advances in Transportation Geotechnics 3, Elsevier, Vol.143, pp.276-283, 2016, doi: 10.1016/j.proeng.2016.06.035, (3rd International Conference on Transportation Geotechnics (ICTG2016), Guimaraes, Portugal, 2016 による selected and peer-reviewed paper)

盛土構造物の排水能力に対する解析的検討, 金澤伸一, 橘伸也, 飯塚敦, 土木学会論文集 A2, 土木学会, Vol.71, No, 2, pp.429-436, 2016.

Effects of stress conditions on B-value measurement, Sugiyama,Y., Kawai,K. and Iizuka,A., *Soil and Foundation*, Vol.56, No.5, pp. 848 - 860 2016, <http://dx.doi.org/10.1016/j.sandf.2016.08.009>

(橘)

Constitutive modeling for compacted bentonite buffer materials as unsaturated and unsaturated porous media

Takayama, K., Tachibana, S., Iizuka, A., Kawai, K. and Kobayashi, K., *Soils and Foundations*, in Press, 2017

Directional confinement effect of geogrid on deformation and bearing capacity of reinforced sand under cyclic and monotonic loadings

Soe, A.A., Kuwano, J., Tachibana, S. and Akram, I., *ジオシンセティックス論文集*, Vol. 31, pp. 45-52, 2016

Performance of confined-reinforced earth under different lateral boundary condition

Hung, H.M., Kuwano, J., Tachibana, S. and Ng' anzi, U.M., *ジオシンセティックス論文集*, Vol. 31, pp. 249-254, 2016

Influence of soil density on the behavior of geogrid-reinforced sand ground

Soe, A.A., Kuwano, J., Akram, I. and Tachibana, S., Proc. of 6th Asian regional conference on geosynthetics – geosynthetics for infrastructure development, pp. 455-464, 2016

Role of prestress in geogrid of confined-reinforced earth method to mitigate bridge approach settlement

Hung, H.M., Kuwano, J. and Tachibana, S., Proc. of 6th Asian regional conference on geosynthetics – geosynthetics for infrastructure development, pp. 916-924, 2016

(吉岡)

Slab pileup in the mantle transition zone and the 30 May 2015 Chichi-jima earthquake Porritt, R. W. and S. Yoshioka, Geophys. Res. Lett., 43, 4905-4912, 2016

Three-dimensional numerical modeling of temperature and mantle flow fields associated with subduction of the Philippine Sea plate, southwest Japan Ji, Y., S. Yoshioka, and T. Matsumoto, J. Geophys. Res. Solid Earth, 121, 458-4482, 2016

Relationships among temperature, dehydration of the subducting Philippine Sea plate, and the occurrence of a megathrust earthquake, low-frequency earthquakes, and a slow slip event in the Tokai district, central Japan Suenaga, N., S. Yoshioka and T. Matsumoto, Physics of the Earth and Planetary Interiors, 260, 44-52, 2016

Three-dimensional numerical modeling of thermal regime and slab dehydration beneath Kanto and Tohoku, Japan Ji, Y., S. Yoshioka, V. C. Manea, M. Manea and T. Matsumoto, J. Geophys. Res. Solid Earth, 121, 2016

(廣瀬)

(長尾)

那覇港周辺の地盤のS波速度構造に関する研究

長尾 毅, 伊藤佳洋, 山田雅行, 森田真弘, 土木学会論文集 B3 (海洋開発), Vol. 72 (2016) No. 2, p. I_479-I_484

近畿地方及び九州地方の港湾におけるサイト増幅特性の簡易評価

長尾 毅, 福田 健, 伊藤佳洋, 山田雅行, 土木学会論文集 B3 (海洋開発), Vol. 72 (2016), No. 2, p. I_485-I_490

岸壁の空洞調査における単点常時微動観測の適用性に関する基礎的考察

伊藤佳洋, 長尾 毅, 山田雅行, 森田真弘, 土木学会論文集 B3 (海洋開発), Vol. 72 (2016) No. 2, p. I_760-I_765

深層地盤構造を用いた近畿地方のサイト増幅特性の簡易評価法に関する研究

長尾 毅, 加納富士, 伊藤佳洋, 山田雅行, 土木学会論文集 A1 (構造・地震工学), Vol. 72, No. 4, p. I_188-I_198, 2016.

高密度強震観測エリアにおけるサイト増幅特性の解析的評価法に関する研究

出口拓磨, 長尾 毅, 山田雅行, 伊藤佳洋, 土木学会論文集 A1 (構造・地震工学), Vol. 72, No. 4, p. I_199-I_212, 2016.

有限差分法を用いた京都盆地におけるサイト増幅特性の評価法に関する研究

長尾 毅, 香川耀平, 山田雅行, 伊藤佳洋, 土木学会論文集 A1 (構造・地震工学), Vol. 72, No. 4, p. I_317-I_330, 2016.

薩摩硫黄島における低周波数のピークを有するサイト増幅特性の要因分析

山田雅行, 伊藤佳洋, 長尾 毅, 野津 厚, 長坂陽介, 大岩根 尚, 土木学会論文集 A1 (構造・地震工学), Vol. 72, No. 4, p. I_691-I_699, 2016.

A Simple Estimation Method of the Probability Distribution of Residual Deformation of Gravity Type Quay Walls Considering the Variation of Earthquake Ground Motion

T. Hirai and T. Nagao, IALCCE2016(Life-cycle of Engineering Systems : Emphasis on Sustainable Civil Infrastructure), pp.485-491, 2016.

An efficient detection method of the peak frequency of microtremor H/V spectral ratio using a low-pass filter

M. Yamada, S. Yagi, T. Nagao, A. Nozu and Y. Ito, 16WCEE, 2017

A simple estimation method of the probability distribution of residual deformation of quay walls considering variation of earthquake ground motion

T. Hirai and T. Nagao, 16WCEE, 2017

Evaluation method of the life-cycle cost of quay walls in view of earthquake resistance

T. Nagao, A. Sone and S. Nishimura, 16WCEE, 2017

(北後)

災害時要援護者の市街地津波避難の搬送速度に関する実験－車椅子、介助車、シルバーカーを用いた3種類の勾配における屋外介助走行速度の比較－, 大津暢人, 北後明彦, ピンエイロアベウタイチコンノ, 李知香, 日本建築学会計画系論文集 Vol. 81 No. 724 pp.1239-1249, 2016.6

東北地方太平洋沖地震被災共同住宅の防火機能維持に着目した被害調査及び居住者の対応:－高層共同住宅における地震後火災に対する安全性評価手法の構築 その1－, 花井 英枝, 河野 守, 高橋 済, 北後 明彦, 村田 明子, 日本建築学会環境系論文集, Vol.81, No.722, pp.345-355, 2016

集合住宅における地震後の防災設備の点検実態に関する研究: 東北地方太平洋沖地震後の仙台市内分譲集合住宅を対象に, 金秀蘭, 北後明彦, 高橋済, 村田明子, 神戸大学大学院工学研究科・システム情報学研究科紀要, 第8号, pp.1-10, 2016

(藤永)

付着強度の低い超高強度鉄筋を用いた RC 柱の耐震性能に及ぼす主筋定着詳細と横拘束方法の影響に関する研究

竹内崇, 藤永隆, 吉森裕樹, 孫玉平, コンクリート工学年次論文集, Vol.38, pp.163-168, 2016年7月

X形配筋を施した柱型のないRC造壁の耐震性能に関する基礎研究

直川周平, 孫玉平, 竹内崇, 藤永隆, コンクリート工学年次論文集, Vol.38, pp.421-426, 2016年7月

鋼製柱によるRC骨組の外付け耐震補強工法に関する実験的研究

谷川和貴, 藤永隆, 宮川和明, 孫玉平, コンクリート工学年次論文集, Vol.38, pp.1099-1104, 2016年7月

充填被覆型鋼管コンクリート長柱の耐力評価法－角形鋼管を内蔵する場合－

金田航平, 藤永隆, 孫玉平, コンクリート工学年次論文集, Vol.38, pp.1207-1212, 2016年7月

STRUCTURAL PERFORMANCE OF DAMAGED OPEN-WEB TYPE SRC BEAM-COLUMNS WITH BOLT-CONNECTED BATTEN STEEL PLATES AFTER RETROFITTING

Takashi FUJINAGA and Yuping SUN, Proc. of 16th World Conference on Earthquake Engineering, 2017.1

(滝口)

Multiple Non-negative Matrix Factorization for Many-to-many Voice Conversion

Ryo Aihara, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, IEEE Transactions on Audio, Speech and Language Processing, Vol. 24, No. 7, pp. 1175-1184, 2016

LLC Revisit: Scene Classification with k-Farthest Neighbours

Katsuyuki Tanaka, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E99-D, No. 5, pp. 1375-1383, 2016

Phone Labeling Based on the Probabilistic Representation for Dysarthric Speech Recognition

Yuki Takashima, Toru Nakashika, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, American Journal of Signal Processing, Vol. 6, No. 1, pp. 19-23, doi:10.5923/j.ajsp.20160601.03, 2016

Non-Parallel Training in Voice Conversion Using an Adaptive Restricted Boltzmann Machine

Toru Nakashika, Tetsuya Takiguchi, Yasuhiro Minami, IEEE Transactions on Audio, Speech and Language Processing, Vol. 24, No. 11, pp. 2032-2045, 2016

Multithreading Cascade of SURF for Facial Expression Recognition

Jinhui Chen, Zhaojie Luo, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, EURASIP Journal on Image and Video Processing, Vol. 2016 (1), 2016:37, doi: 10.1186/s13640-016-0140-7, 13 pages, 2016

Selection of an Optimum Random Matrix Using a Genetic Algorithm for Acoustic Feature Extraction

Yuichiro Kataoka, Toru Nakashika, Ryo Aihara, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, IEEE/ACIS International Conference on Computer and Information Science, pp. 983-988, 2016

Emotional Voice Conversion Using Deep Neural Networks with MCC and F0 Features

Zhaojie Luo, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, IEEE/ACIS International Conference on Computer and Information Science, pp. 977-981, 2016

Lip Reading Using a Dynamic Feature of Lip Images and Convolutional Neural Networks

Yiting Li, Yuki Takashima, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, IEEE/ACIS International Conference on Computer and Information Science, pp. 971-976, 2016

Parallel Dictionary Learning for Voice Conversion Using Discriminative Graph-embedded Non-negative Matrix Factorization

Ryo Aihara, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, Interspeech, pp. 292-296, 2016

Audio-Visual Speech Recognition Using Bimodal-Trained Bottleneck Features for a Person with Severe Hearing Loss

Yuki Takashima, Ryo Aihara, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, Nobuyuki Mitani, Kiyohiro Omori, and Kaoru Nakazono, Interspeech, pp. 277-281, 2016

Dysarthric Speech Modification Using Parallel Utterance Based on Non-negative Temporal Decomposition

Ryo Aihara, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, 7th Workshop on Speech and Language Processing for Assistive Technologies, pp. 75-79, 2016

Emotional Voice Conversion Using Neural Networks with Different Temporal Scales of F0 based on Wavelet Transform

Zhaojie Luo, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, Toru Nakashika, 9th ISCA Speech Synthesis Workshop, pp. 153-158, 2016

Expression Recognition with Ri-HOG Cascade

Jinhui Chen, Zhaojie Luo, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, Third Workshop on Computer Vision for Affective Computing, 14 pages, 2016

Estimation of Object Functions Focusing on Feature of Object Parts

Ryunosuke Azuma, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, 23rd International Workshop on Frontiers of Computer Vision, 2017

Feature Extraction and Classification of Multispectral Imagery by Using Convolutional Neural Network

Atsushi Yoshihara, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, 23rd International Workshop on Frontiers of Computer Vision, P1-6, 2017

Visual Sound Recovery Using Momentary Phase Variations

Yusuke Yasumi, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, 23rd International Workshop on Frontiers of Computer Vision, P2-6, 2017

(大石)

移流モデルを用いた短時間降雨予測精度向上のための予測パターン選別手法に関する研究

伊藤佑果・直原悠紀子・大石哲・中北英一, 土木学会論文集 B1(水工学) Vol. 73, No. 4, I_229-I_234, 2017.

(小林)

Accuracy of KU-STIV for discharge measurement in Ghana, Africa

Ichiro FUJITA, Kenichiro KOBAYASHI, Frederick Yaw LOGAH, Frank TEYE OBLIM, Bob ALFA, Saya TATEGUCHI, Kwabena KANKAM-YEBOAH, Gabriel APPIAH, Collins Kissi ASANTE-SASU, Ryo KAWASAKI, Hirohiko ISHIKAWA, Journal of Japan Society of Civil Engineers, Ser. B1 (Hydraulic Engineering), Vol. 73, No. 4, I_499-I_504, 2017.

洪水氾濫解析を対象とした浅水流方程式の適用性に関する検討

小林健一郎・中山恵介・阪口詩乃, 土木学会論文集 B1(水工学) Vol. 73, No. 4, I_1405-I_1410, 2017.

平成 24 年台風 4 号を対象とした和歌山県新宮川流域における擬似温暖化時の降雨と土壌雨量指数の評価

西岡誠悟・小林健一郎・奥勇一郎・江種伸之・田内裕人, 土木学会論文集 B1(水工学) Vol. 73, No. 4, I_187-I_192, 2017

貯水池における出水時の成層場鉛直混合に関する検討

中山恵介・藤原建紀・藤井智康・小林健一郎・中島祐輔・佐藤啓央, 土木学会論文集 B1(水工学) Vol. 73, No. 4, I_979-I_984, 2017

Ensemble flood simulation for a small dam catchment in Japan using 10 and 2 km resolution nonhydrostatic model rainfalls

Kenichiro Kobayashi, Shigenori Otsuka, Apip, and Kazuo Saito, Nat. Hazards Earth

Syst. Sci., 16, 1821-1839, 2016,
<http://www.nat-hazards-earth-syst-sci.net/16/1821/2016/>,
doi:10.5194/nhess-16-1821-2016

(岩田)

(大路)

Cefmetazole for bacteremia caused by ESBL-producing enterobacteriaceae comparing with carbapenems.

Fukuchi T, Iwata K, Kobayashi S, Nakamura T, Ohji G.
BMC Infect Dis. 2016 Aug 18;

2, Is de-escalation of antimicrobials effective? A systematic review and meta-analysis.

Ohji G, Doi A, Yamamoto S, Iwata K.
Int J Infect Dis. 2016 Aug;49:71-9.

15.4 学術報告

(飯塚)

応力条件がB値計測に及ぼす影響, 田中博之, 杉山友理, 飯塚敦, 都市安全研究センター研究報告, 第20号, pp.18-31, 2016,

海底地盤からのサンプリングに伴う応力変化が強度特性に及ぼす影響, 中谷奈央, 杉山友理, 飯塚敦, 都市安全研究センター研究報告, 第20号, pp.32-39, 2016

(吉岡)

2002年にメキシコで発生したslow slip eventに伴うすべりの伝播現象は応力緩和モデルによって説明できるか? ~モデルの構築~, 吉岡祥一, 神戸大学都市安全研究センター 研究報告 第20号, 1-8, 2016.

(廣瀬)

GNSS観測による豊後水道周辺でのプレート間すべりの分解能, 竹内里紗, 廣瀬仁, 松島健, 田部井隆雄, 西村卓也, 都市安全研究センター研究報告 20, 9-17. 2016.

(長尾)

御前崎半島におけるサイト増幅特性の解析的評価
長尾 毅, 出口拓磨, 都市安全研究センター研究報告, 2016

(北後)

高齢者施設からの広域避難を想定した避難車両への要援護者搬送実験, 久米智士, 北後明彦, 李知香, 神戸大学都市安全研究センター研究報告, 第20号, pp.50-58, 2016.3

熊本地震後に発生した火災事例調査報告, 北後明彦, 特集 平成28年熊本地震(1), 消防防災の科学, 第126号, pp.25-32, 2016

(藤永)

付着強度の低い超高強度鉄筋を用いたRC柱の耐震性能向上およびその評価方法に関する研究

吉森裕樹, 大仲菜保子, 竹内崇, 藤永隆, 孫玉平, 神戸大学都市安全研究センター研究報告, 第 20 号, pp.59-67, 2016 年 3 月

2015 年ネパール地震の被害調査報告

藤永隆, ロハニ タラニディ, 竹内崇, 神戸大学都市安全研究センター研究報告, 第 20 号, pp.219-228, 2016 年 3 月

CFT 構造計算規準の概要 (作成方針と枠組み)

津田恵吾, 福元敏之, 藤永隆, 2016 年日本建築学会大会 SCCS パネルディスカッション資料, pp.1-10, 2016 年 8 月

(滝口)

非負値テンソル分解を用いたエアコン音の印象関連脳活動の抽出

矢野 肇, 滝口 哲也, 有木 康雄, 保手浜 拓也, 神谷 勝, 中川 誠司, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. 116, No. 189, pp. 37-40, 2016

Discriminative Graph-embedded Non-negative Matrix Factorization を用いた声質変換のためのパラレル辞書学習

相原 龍, 滝口 哲也, 有木 康雄, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. 116, No. 189, pp. 59-64, 2016

構音障害者音声認識のための適応型 restricted Boltzmann machine を用いた特徴量抽出

高島悠樹, 中鹿亘, 滝口哲也, 有木康雄, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. 116, No. 477, pp. 321-326, 2017

話者性を維持した構音障害者のための HMM 音声合成システム

上田 怜奈, 滝口 哲也, 有木 康雄, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. 116, No. 475, pp. 301-306, 2017

(小林)

西宮を対象とした浅水流方程式による津波シミュレーションの適用可能性検討

小林健一郎, 木村圭佑, 都市安全研究センター研究報告 20, 95-99, 2017.

15.5 学術講演

(飯塚)

ベイズ推定を用いた被害予測モデルと災害対応におけるタイムライン分析, 本田和也, 小谷稔, 飯塚敦, 第 51 回地盤工学研究発表会 (岡山), CD-ROM0059, 平成 28 年 9 月 13 日 (火) ~ 平成 28 年 9 月 15 日 (木), 2016

粘性曲面モデルを用いた構造の発達・劣化の表現, 平田昌史, 飯塚敦, 太田秀樹, 第 51 回地盤工学研究発表会 (岡山), CD-ROM0188, 平成 28 年 9 月 13 日 (火) ~ 平成 28 年 9 月 15 日 (木), 2016

デコルマ帯における固着メカニズムの解明, 麻生勇人, 飯塚敦, 竹山智英, 杉山友理, 佐々木陽亮, 第 51 回地盤工学研究発表会 (岡山), CD-ROM0369, 平成 28 年 9 月 13 日 (火) ~平成 28 年 9 月 15 日 (木), 2016

海底地盤から採取したサンプリング試料の強度発現メカニズム, 杉山友理, 中谷奈央, 竹山智英, 飯塚敦, 第 51 回地盤工学研究発表会 (岡山), CD-ROM0346, 平成 28 年 9 月 13 日 (火) ~平成 28 年 9 月 15 日 (木), 2016

間隙保水特性と非可逆変形特性が B 値発現に及ぼす影響, 宇治亮佑, 杉山友理, 田中博之, 河井克之, 竹山智英, 飯塚敦, 第 51 回地盤工学研究発表会 (岡山), CD-ROM0347, 平成 28 年 9 月 13 日 (火) ~平成 28 年 9 月 15 日 (木), 2016

TC106 Unsaturated soils における世界的な動向, 飯塚敦, 第 51 回地盤工学研究発表会 (岡山), CD-ROM0035, 平成 28 年 9 月 13 日 (火) ~平成 28 年 9 月 15 日 (木), 2016

ジオテキスタイル補強土構造物における補強効果の検討, 織田裕至, 川勝拓哉, 飯塚敦, 竹山智英, 第 51 回地盤工学研究発表会 (岡山), CD-ROM0786, 平成 28 年 9 月 13 日 (火) ~平成 28 年 9 月 15 日 (木), 2016

(橘)

Effect of water infiltration on behavior of unsaturated compacted soil at constant deviatoric stress

Rasool, A.M., Miyazaki, Y., Takamine, S., Kuwano, J., and Tachibana, S., 第 51 回地盤工学研究発表会講演集, pp. 669-700, 2016

放射性廃棄物地層処分におけるベントナイト緩衝材の変質評価

伊藤真司, 飯塚敦, 橘伸也, 林大介, 第 51 回地盤工学研究発表会講演集, pp. 729-730, 2016

Effect of hydraulic gradient on internal erosion in soil column test

Yee, S.W., Kuwano, J., Tachibana, S. and Kobayashi, A., 第 51 回地盤工学研究発表会講演集, pp. 737-738, 2016

Influence of footing orientation on geogrid reinforced soil under cyclic loading

Soe, A.A., Tachibana, S., Kuwano, J. and Akram, I., 第 51 回地盤工学研究発表会講演集, pp. 1523-1524, 2016

Effects of lateral boundary condition on the behavior of confined-reinforced earth

Hung, H.M., Ng' anzi, U.M., Kuwano, J. and Tachibana, S., 第 51 回地盤工学研究発表会講演集, pp. 1527-1528, 2016

Effects of tie-rod on the behavior of confined-reinforced earth

Ng' anzi, U.M., Hung, H.M., Kuwano, J. and Tachibana, S., 第 51 回地盤工学研究発表会講演集, pp. 1529-1530, 2016

Bearing capacity evaluation of samples prepared by sand pluviation

Akram, I., Kuwano, J., Tachibana, S. and Soe, A.A., 第 51 回地盤工学研究発表会講演集, pp. 1557-1558, 2016

(吉岡)

Subduction of oceanic plate irregularities in Mexico and Japan and the influence on large megathrust earthquakes, Marina Manea, Vlad C. Manea and Shoichi Yoshioka, 日本地球惑星科学連合 2016 年大会, SIT12-P10, 千葉, 2016 年 5 月.

Three-dimensional numerical modeling for subduction thermal regime, slab dehydration, and mantle flow beneath Kanto to Tohoku, Japan, Yingfeng Ji and Shoichi Yoshioka, 日本地球惑星科学連合 2016 年大会, SCG57-08, 千葉, 2016 年 5 月.

九州地方の電気伝導度構造と温度構造から求められたマンツルの流体分布, 畑 真紀・上嶋 誠・吉岡 祥一・末永 伸明, 日本地球惑星科学連合 2016 年大会, SCG57-09, 千葉, 2016 年 5 月.

Mapping Crustal Structure Change in Tohoku With Time-Varying P-to-S Receiver Functions, Robert W. Porritt and Shoichi Yoshioka, Crustal Dynamics 2016, BP78, 岐阜, 2016 年 7 月.

Slab Dehydration, Interplate Hydrousness and Seismic Distribution in Modeling deformation, faulting, and mountain building in the island-arc crust of northeastern and central Japan considering heterogeneous thermal structure, Yingfeng Ji and Shoichi Yoshioka, Crustal Dynamics 2016, BP79, 岐阜, 2016 年 7 月.

Geo-fluids distribution in mantle inferred from the electrical conductivity and simulated thermal, Maki Hata, Makoto Uyeshima, Shoichi Yoshioka, Nobuaki Suenaga and Takumi Matsumoto, 23rd Electromagnetic Induction Workshop, S4.1-O224, ChiangMai, Thailand, 2016 年 8 月.

Three-dimensional numerical modeling of temperature and dehydration fields associated with subduction of the Philippine Sea plate, southwest Japan, Shoichi Yoshioka, Yingfeng Ji and Takumi Matsumoto, 35rd General Assembly of the European Seismological Commission, ESC2016-577, Trieste, Italy, 2016 年 9 月.

3D thermal convection modeling associated with subduction of the Cocos plate in southern Mexico - Effects of trench retreat on temperature and flow fields -, Nobuaki Suenaga, Yingfeng Ji, Shoichi Yoshioka, Vlad C. Manea and Maria Manea, Joint Workshop on Slow Earthquakes 2016, P14, 東京, 2016 年 9 月.

Three-dimensional numerical modeling of temperature and dehydration associated with subduction of the Philippine Sea plate, southwest Japan, Shoichi Yoshioka, Yingfeng Ji and Takumi Matsumoto, The 1st Asia-Pacific Workshop on Lithosphere and Mantle Dynamics, Taipei, 2016 年 9 月(招待講演).

Slab dehydration, thermal regime, the distribution of tectonic tremors and seismicity beneath Hikurangi, Yingfeng Ji and Shoichi Yoshioka, 日本地震学会秋季大会, S05-02, 愛知, 2016 年 10 月.

Numerical simulations of temperature, dehydration, and flow fields associated with subduction of the Cocos plate, and its relation to the occurrence of interplate seismic events in southern Mexico, Nobuaki Suenaga, Yingfeng Ji, Shoichi Yoshioka, Maria Manea and Vlad C. Manea, Annual Meeting 2016, SE12-4, Puerto Vallarta, Mexico, 2016 年 11 月.

Thermal regime, slab dehydration and seismicity distribution beneath the Hikurangi subduction zone based on 3D simulation, Yingfeng Ji and Shoichi Yoshioka, AGU FALL MEETING 2016, T21C-2834, San Francisco, 2016 年 12 月.

Numerical simulations of temperature, dehydration, and flow fields associated with subduction of the Cocos plate, and its relation to the occurrence of interplate seismic events in southern Mexico, Nobuaki Suenaga, Yingfeng Ji, Shoichi Yoshioka, Maria Manea and Vlad C. Manea, AGU FALL MEETING 2016, T21C-2835, San Francisco, 2016 年 12 月.

(廣瀬)

スロースリップイベントのすべり域制約のためのGNSS観測計画, 廣瀬仁, 宮崎真一, 松島健, 田部井隆雄, 山崎健一, 西村卓也, 新学術領域「スロー地震学」観測班集会, 東京, 2017年1月

Spatial variation in Earth structure inferred by GNSS seasonal deformations due to snow loads in northeast Japan, Kurisu R., Hirose H., Nishimura T., AGU Fall Meeting 2016, San Francisco, CA, USA, December 2016

A02 測地観測によるスロー地震の物理像の解明, 廣瀬仁, 宮崎真一, 松島健, 田部井隆雄, 山崎健一, 田中愛幸, 木村武志, 板場智史, 高木涼太, 西村卓也, 太田雄策, 矢来博司, 石川直史, 新学術領域「スロー地震学」キックオフミーティング in Joint Workshop on Slow Earthquakes 2016, 東京, 2016年9月

新学術領域 スロー地震学「測地観測によるスロー地震の物理像の解明」(提案内容), 廣瀬仁, 京都大学防災研究所 拠点研究(一般推進研究)「南海トラフ巨大地震想定震源域南西端におけるプレート間固着状態の解明」キックオフミーティング, 宮崎, 2016年4月

GNSS年周地殻変動と積雪荷重の対比から見る地盤構造の地域性, 栗栖理恵, 廣瀬仁, 西村卓也, 日本地球惑星科学連合 2016年大会, 千葉, 2016年5月

Interaction between slow earthquakes in and around Bungo channel, Nankai subduction zone, Obara K., Takagi R., Yamashita Y., Asano Y., Matsuzawa T., Tanaka S., Hirose H., Maeda T., 日本地球惑星科学連合 2016年大会, 千葉, 2016年5月

(長尾)

那覇港周辺の琉球石灰岩層のS波速度に関する研究
長尾 毅, 土木学会関西支部年次学術講演会, 2016

クリギング法を用いた近畿地方に関するサイト増幅特性の簡易評価法
福田 健, 長尾 毅, 伊藤佳洋, 山田雅行, 土木学会関西支部年次学術講演会, 2016

ニューマチックケーソン式栈橋に対する杭の特性値 β を用いた照査方法の適用性について
柴田大介, 長尾 毅, 第51回地盤工学研究発表会, 2016

栈橋の簡易耐震性能照査法に関する基礎的研究—上部工慣性力
寺島彰人, 長尾 毅, 大澤史崇, 第51回地盤工学研究発表会, 2016

ニューマチックケーソン式栈橋の耐震性能照査法における杭の特性値 β の適用性について
柴田大介, 長尾 毅, 土木学会年次学術講演会, 2016

単点常時微動観測による岸壁の空洞検出の試み
伊藤佳洋, 長尾 毅, 山田雅行, 森田真弘, 土木学会年次学術講演会, 2016

栈橋の簡易耐震性能照査法に関する基礎的研究—地盤剛性
寺島彰人, 長尾 毅, 大澤史崇, 土木学会年次学術講演会, 2016

熊本地震によるKiK-net益城での観測地震動と事前の活断層評価に基づく推定地震動との比較
福島康宏, 後藤浩之, 長尾 毅, 尾茂淳平, 末富岩雄, 第35回地震工学研究発表会,
2016

2016年熊本地震による益城町の地震被害と地盤震動特性の相関に関する研究
長尾 毅, Tara Nidhi Lohani, 福島康宏, 伊藤佳洋, 北後明彦, 尾茂淳平, 第35回
地震工学研究発表会, 2016

性能設計体系における新たな耐震設計事例-設計地震動-
長尾 毅, 末富岩雄, 福島康宏, 今村年成, 北原武嗣, 第35回地震工学研究発表
会, 2016

性能設計体系における新たな耐震設計事例-構造設計-
今村年成, 坂井康伸, 平井俊之, 長尾 毅, 北原武嗣, 第35回地震工学研究発表
会, 2016

ニューマチックケーソン式栈橋の照査用震度算定に関する基礎的研究
柴田大介, 長尾 毅, 第35回地震工学研究発表会, 2016

クリギング法等を用いた中部・西部日本のサイト増幅特性の簡易評価法に関する研究
長尾 毅, 福田 健, 伊藤佳洋, 第35回地震工学研究発表会, 2016

(北後)

地域の人々の生活の方向性に沿った改善, 北後明彦, 今後の密集市街地の改善整備のあり方に
関する情報交換会(国土交通省住宅局市街地住宅整備室、都市局都市安全課主催),
2016.4

今後の耐震基準、耐震化のあり方について, 北後明彦, 神戸大学震災復興支援プラットフォー
ム第16回ワークショップ, 2016.4

高齢者福祉施設における車両への避難搬送に関する研究, 李知香, 久米智士, 北後明彦, 日本
火災学会研究発表会梗概集, pp.302-303, 2016.5

2016年熊本地震後に発生した火災に関する調査報告, 北後明彦, 神戸大学都市安全研究センタ
ー第210回オープンゼミナール, 2016.6

照明による津波避難誘導の社会実験～南あわじ市福良地区の事例(その1)実験概要と実験環境,
北後明彦, 高嶋彰, 秋月有紀, 田中健一, ピニエイロアベウタイチコンノ, 鈴木広
隆・安福健祐, 日本建築学会大会学術講演梗概集(防火), pp.315-316, 2016.8

照明による津波避難誘導の社会実験～南あわじ市福良地区の事例(その2)住民の避難行動分析,
秋月有紀, 高嶋彰, ピニエイロアベウタイチコンノ, 北後明彦, 武内芳夫, 鈴木広
隆, 安福健祐, 日本建築学会大会学術講演梗概集(防火), pp.317-318, 2016.8

照明による津波避難誘導の社会実験～南あわじ市福良地区の事例(その3)想定観光客の夜間避
難行動分析, 武内芳夫, 北後明彦, 安福健祐, 秋月有紀, ピニエイロアベウタイチ
コンノ, 鈴木広隆, 高嶋彰, 日本建築学会大会学術講演梗概集(防火), pp.319-320,
2016.8

指定外避難所の発生状況に関する研究－東日本大震災時の釜石市を事例として－，荒木裕子，坪井塑太郎，北後明彦，日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画)，pp.905-906，2016.8

被災地図を用いた地域再建支援調査－2014年丹波市豪雨災害を事例として，ピニェイロアベウタイチコンノ，北後明彦，日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画)，pp.1081-1082，2016.8

大規模可視化システムを用いた津波避難誘導灯の誘目性検証実験，安福 健祐，高嶋 彰，松井俊成，武内 芳夫，秋月 有紀，北後 明彦，日本図学会大会学術講演論文集，pp.51-54，2016

災害危険区域指定における地域特性に応じた検討過程の考察，荒木裕子，北後明彦，日本災害復興学会 2016 年度石巻大会，2016.10

熊本地震における益城町の指定外避難所開設状況調査，荒木裕子，坪井塑太郎，北後明彦，第 39 回（2016 年度）地域安全学会研究発表会（秋季），2016.11

熊本地震の被害状況から学ぶ，北後明彦，平成 28 年度ひょうご防災リーダーフォローアップ研修，2016.11

地震への備え－熊本地震からの教訓を生かす，北後明彦，神戸大学都市安全研究センターオープンセンター2016，2016.11

地震への備え～ 阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震からの教訓を生かす～，北後明彦，大阪消防振興協会・大阪市立阿倍野防災センター防災講演会 2017，2017.1

(藤永)

拘束低降伏点鋼せん断パネルの履歴特性に関する研究（その 1 実験概要と結果）
三上紗綾，胡弘宇，竹内崇，藤永隆，孫玉平，日本建築学会大会学術講演梗概集，2016 年 8 月

拘束低降伏点鋼せん断パネルの履歴特性に関する研究（その 2 座屈荷重評価式の提案）
胡弘宇，三上紗綾，竹内崇，藤永隆，孫玉平，日本建築学会大会学術講演梗概集，2016 年 8 月

二軸曲げを受ける長方形 CFT 柱の耐力
藤永隆，孫玉平，日本建築学会大会学術講演梗概集，2016 年 8 月

X 形配筋を施した柱型のない RC 造壁の耐震性能に関する実験的研究（その 1 実験概要）
孫玉平，直川周平，竹内崇，藤永隆，日本建築学会大会学術講演梗概集，2016 年 8 月

X 形配筋を施した柱型のない RC 造壁の耐震性能に関する実験的研究（その 2 実験結果）
直川周平，孫玉平，竹内崇，藤永隆，日本建築学会大会学術講演梗概集，2016 年 8 月

アンダーマッチング溶接により組み立てられた超高強度鋼 CFT 部材の構造性能と設計法 その 1 実験計画および使用材料の機械的性質把握
濱口眞由美，藤永隆，河野昭彦，蜷川利彦，松尾真太郎，日本建築学会九州支部研究報告，2017 年 3 月

(滝口)

エアコン音の聴感印象と自発脳磁界の ERS/ERD の関係

矢野 肇, 滝口 哲也, 有木 康雄, 保手浜 拓也, 神谷 勝, 中川 誠司, 第 31 回日本生体磁気学会大会論文集, Vol. 29, No. 1, pp. 74-75, 2016

音声想起に伴う誘発脳磁界の時空間的特性

宇澤志保美, 滝口 哲也, 有木 康雄, 中川 誠司, 第 31 回日本生体磁気学会大会論文集, Vol. 29, No. 1, pp. 104-105, 2016

映像中の変動の大きな物体に対する音源復元のための物体振動抽出手法の検討

安見 祐亮, 滝口 哲也, 有木 康雄, 第 19 回画像の認識・理解シンポジウム, PS2-62, 2 pages, 2016

SIFT Boosting for Handwriting Recognition

Jinhui Chen, Takashi Kamihigashi, Munehiko Itoh, Yasuo Takatsuki, Tetsuya Takiguchi, Yasuo Ariki, 19th Meeting on Image Recognition and Understanding, PS2-48, 2 pages, 2016

Object-Based Geo-Eye Satellite Image Segmentation for Tsunami Disaster Map Preparation

Mohammad Reza Poursaber, Yasuo Ariki, Tetsuya Takiguchi, Atsushi Yoshihara, Mohammad Safi, 19th Meeting on Image Recognition and Understanding, PS1-57, 2 pages, 2016

衛星画像解析と地図情報の統合による被害状況地図の作成

吉原 篤, 笹島 敬介, 滝口 哲也, 有木 康雄, 第 19 回画像の認識・理解シンポジウム, PS1-36, 2 pages, 2016

Convolutional Neural Networks を用いた物体の機能推定

東 龍之介, 北野陽祐, 滝口 哲也, 有木 康雄, 第 19 回画像の認識・理解シンポジウム, PS1-32, 2 pages, 2016

複素 NMF を用いた声質変換の検討

李 権俊, 相原 龍, 滝口 哲也, 有木 康雄, 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会講演論文集, 3-Q-34, pp. 277-280, 2016

非負値行列因子を用いたマルチモーダル声質変換における画像特徴量の検討

羅 里奈, 相原 龍, 滝口 哲也, 有木 康雄, 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会講演論文集, 3-Q-33, pp. 273-276, 2016

話速補正に基づく話者性を維持した構音障害者のための音声合成システム

上田 怜奈, 滝口 哲也, 有木 康雄, 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会講演論文集, 3-Q-17, pp. 229-232, 2016

Factored 3-Way Restricted Boltzmann Machine を用いたマルチモーダル音声認識の検討

高島 悠樹, 中鹿 亘, 滝口 哲也, 有木 康雄, 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会講演論文集, 3-Q-10, pp. 109-112, 2016

非負値行列因子分解に基づく声質変換のための Graph Embedding を用いたパラレル辞書学習

相原 龍, 滝口 哲也, 有木 康雄, 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会講演論文集, 3-5-3, pp. 155-158, 2016

脳磁界計測を用いたエアコン音の聴感印象推定の試み –非負値テンソル分解による関連脳活動の抽出–

矢野 肇, 滝口 哲也, 有木 康雄, 神谷 勝, 中川 誠司, 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会講演論文集, 2-P-48, pp. 673-676, 2016

脳磁界データからの想起音声の判別に係る特徴量の推定 –ウェーブレット変換と SVM による解析–

宇澤 志保美, 滝口 哲也, 有木 康雄, 中川 誠司, 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会講演論文集, 2-P-28, pp. 621-624, 2016

脳磁界計測を用いたエアコン音の聴感印象推定の試み –比較判断を用いた印象予測モデルの学習–

矢野肇, 滝口哲也, 有木康雄, 神谷勝, 中川誠司, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 1-P-11, pp. 539-542, 2017

音源復元のための映像中の微小振動方向の解析

安見祐亮, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 1-P-18, pp. 557-558, 2017

適応型 Gaussian-Gaussian RBM を用いた構音障害者音声認識

高島悠樹, 中鹿亘, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 1-Q-5, pp. 95-98, 2017

構音障害者のための話者性を維持した HMM 音声合成システムの提案

上田怜奈, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 1-Q-20, pp. 267-270, 2017

DNN を用いた聴覚障害者の音声合成の検討

北村毅, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 1-Q-26, pp. 285-288, 2017

ニュース情報検索「NetTv」における質問種別の推定

丸本 理貴人, 田中克幸, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 2-P-9, pp. 155-158, 2017

料理アシスト対話システムにおけるユーザ発話のクラス分類

山田耀司, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 2-P-10, pp. 159-162, 2017

ユーザーに対話的なサポートを行うシステム ~ オセロゲームの場合について ~

松好祐紀, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 2-P-11, pp. 163-166, 2017

声質変換のための音素識別的特徴量

相原龍, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 2-P-35, pp. 359-362, 2017

声質変換における非周期性指標の影響とその評価

伊藤大貴, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 2-P-36, pp. 363-366, 2017

最尤変換による唇動画像からの音声生成

羅里奈, 相原龍, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 2-P-40, pp. 373-376, 2017

Arbitrary-scales continuous wavelet transform for emotional voice conversion

羅兆傑, 滝口哲也, 有木康雄, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 2-P-41, pp. 377-380, 2017

脳磁界計測による音声明瞭度に関連した皮質活動の推定

嵯峨直樹, 矢野 肇, 滝口哲也, 有木康雄, 添田善治, 中川誠司, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 3-Q-41, pp. 1515-1518, 2017

音の想起に伴う脳磁界反応: 想起音の基礎パラメータの影響の検討

宇澤志保美, 滝口哲也, 有木康雄, 中川誠司, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会講演論文集, 3-Q-44, pp. 1523-1526, 2017

(大石)

統計的手法を用いたビデオゾンデの定量性検討に関する研究

小川まり子・大石哲・鈴木賢士・中川勝広・山口弘誠・中北英一, 日本気象学会 2016 年度秋季大会, 2016.10.26-28 名古屋大学 (愛知県)

移流モデルを用いた短時間降雨予測精度向上のための予測パターン選別手法に関する研究

伊藤佑果・直原悠紀子・大石哲・中北英一, 水工学講演会, 2017.3.15~17 九州大学(福岡県)

気象レーダーを用いた火山噴出物の堆積量推定に関する研究

村西将英・大石哲, 日本火山学会秋季大会 2016, 2016.10.13, 富士吉田市民会館・ふじさんホール(山梨県)

偏波レーダーを用いた氷点下層における氷粒子の粒径分布と体積量推定に関する研究

佐藤卓弥・小川まり子・大石哲, 水文・水資源学会, 2016 年度総会・研究発表会(福島大会) 2016.9.15-17, コラッセふくしま(福島県)

偏波ドップラーレーダーと雷探知装置を用いた雷雲内電荷電場推定手法に関する研究

千原拓馬・大石哲・小池雄大・小川まり子, 日本気象学会 2016 年度春季大会, 2016.5.18-21, 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都)

Integrating X-MP Radar Data to Estimate Rainfall Induced Debris Flow in The Merapi Volcanic Area

Syarifuddin, M., Oishi, S., Legono, D., Hapsari, R.I. : Third Symposium on Two-Phase Modelling for Sediment Dynamics in Geophysical Flow, Chuo University 2016.9.12-14,

X-Band Multi Parameter (X-MP) : Radar for Volcanic Debris Flow Forecasting

Syarifuddin, M., Oishi, S., Muranishi, M., Ogawa, M., Hapsari, R.I., Legono, D., Iguchi, M., The Merapi Volcanic Area Annual Network on Debris Flow, 2016 2016.11.29-12.2

(小林)

極端台風による兵庫県都賀川の流出・浸水予測

小林 健一郎, 奥 勇一郎, 川崎 遼, 藤田 一郎, 水文・水資源学会 2016 年度研究発表会, (福島大会) 2016. 9. 15-17, コラッセふくしま(福島県)

洪水災害軽減のための田んぼダム効果に関する基礎的研究

小林 健一郎, 河野 泰典, 水文・水資源学会2016年度研究発表会, (福島大会) 2016. 9. 15-17, コラッセふくしま(福島県)

マルチ温暖化シナリオに基づいた平成25年台風18号の擬似温暖化実験

能登谷拓, 小林健一郎, 奥勇一郎, 木村圭佑, 平成28年度土木学会全国大会 第71回年次学術講演会, 2016. 9. 15-17, 東北大学

16. 研究指導

16.1 博士論文

海底地盤の力学性状把握に関する基礎的研究, 杉山友理, 工学研究科市民工学専攻, 神戸大学博士(工学), 主査: 飯塚敦, 副査: 大石哲, 芥川真一, 阪口秀

数値計算による開水路乱流における乱れと水面変動の相互作用に関する研究, 吉村英人工学研究科市民工学専攻, 神戸大学博士(工学), 主査: 藤田一郎, 副査: 大石哲, 中山恵介

Voice Conversion Based on Non-negative Matrix Factorization and Its Application to Practical Tasks, 相原 龍, システム情報学研究科情報科学専攻, 神戸大学博士(工学), 主査: 大川 剛直, 副査: 玉置久, 的場修, 滝口哲也

塩害劣化した既設PC道路橋の構造安全性評価および維持管理の信頼性向上に関する研究, 美濃智広, 神戸大学博士(工学), 主査: 森川英典, 副査: 芥川真一, 長尾 毅, 三木朋広

Seismic performance evaluation of reinforced concrete structures using multi-directional polygonal 3D lattice model, Simao Mauro Ricardo, 神戸大学博士(工学), 主査: 三木朋広副査: 森川英典, 芥川真一, 長尾 毅

市街地津波避難における災害時要援護者支援に関する研究, 大津暢人, 工学研究科建築学専攻, 神戸大学博士(工学), 主査: 北後明彦, 副査: 山崎寿一, 谷明憲

16.2 修士論文

リスク・アセスメント研究部門

B値に与える影響因子とB値測定手法がせん断挙動に及ぼす影響, 宇治亮佑, 神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻(飯塚)

海底地盤におけるサンプリング時の応力解放に伴う乱れに関する検討, 岡田真理子,, 神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻(飯塚)

地盤動的解析のための試験結果のばらつきを考慮したパラメータ範囲の検討, 鹿瀬一希,, 神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻(飯塚)

ジオテキスタイル補強土の補強効果の評価手法, 織田裕至,, 神戸大学大学院工学研究科市民

工学専攻（飯塚）

化学変質を考慮したベントナイト緩衝材の長期挙動評価，神藤卓哉，，神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻（飯塚）

デコルマ帯における変質を考慮したせん断挙動モデル，妹川賢司，，神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻（飯塚）

地震活動を考慮した断層すべりの測地インヴァージョン，田中拓，神戸大学大学院理学研究科惑星学専攻（廣瀬）

リスク・マネジメント研究部門

災害リスクからみた被災市街地における住宅地開発に関する研究－東日本大震災後の防災集団移転や民間住宅地開発などを対象として－，上田祐司，神戸大学大学院工学研究科建築学専攻（北後）

熊本地震における避難施設での要配慮者への対応に関する研究，高尾優樹，神戸大学大学院工学研究科建築学専攻（北後）

フィリピンのバランガイにおけるコミュニティ活動を活かした防災力形成に関する研究，曾輪紗耶加，神戸大学大学院国際協力研究科地域協力政策専攻（北後）

コンクリート系建築物の鋼製柱外付け耐震補強工法に関する研究，谷川和貴，神戸大学大学院工学研究科建築学専攻

地盤構造とサイト増幅特性の相関に関する研究，加納嵩士，神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻（長尾）

地盤変形の影響を考慮した栈橋の耐震性能簡易評価法に関する研究，小田隼也，神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻（長尾）

動的解析に基づく既存サイホンの耐震照査手法の提案，平山智章，神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻（長尾）

リスク・コミュニケーション研究部門

レーダーと移流モデルを用いた短時間降雨予測精度向上とその活用方法に関する研究，伊藤佑果，神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻

豪雨を対象とした複合気象センサーとしての洋上GNSSの活用に関する研究，林和成，神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻

気象レーダーによる火山噴出物堆積量推定手法の開発に関する研究，村西将秀，神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻

極端気象と都市化が流出過程に与える影響に関する兵庫県の特徴的河川での比較研究，山本健太郎，神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻

構音障害者のための話者性を維持したHMM音声合成システムの提案, 上田怜奈, 神戸大学大学院システム情報学研究科情報科学専攻 (滝口)

適応型Restricted Boltzmann Machineを用いた構音障害者の音声特徴量抽出, 高島悠樹, 神戸大学大学院システム情報学研究科情報科学専攻 (滝口)

詳細行動認識のためのPart Poolを用いた行動候補選択, 西田和博, 神戸大学大学院システム情報学研究科情報科学専攻 (滝口)

脳磁界計測を用いた聴感印象推定, 矢野肇, 神戸大学大学院システム情報学研究科情報科学専攻 (滝口)

深層学習を用いた料理アシスト型音声対話システムの構築, 山田耀司, 神戸大学大学院システム情報学研究科情報科学専攻 (滝口)

Emotional Voice Conversion Using Deep Neural Networks, 羅兆傑, 神戸大学大学院システム情報学研究科情報科学専攻 (滝口)

マルチスケールメコン河洪水モデルによる大規模流出・氾濫現象の基礎的検討, 井上将徳, 神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻 (小林)

武庫川流域流出氾濫モデルによる洪水の分析, 岡本尚馬, 神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻 (小林)

マルチエージェントモデルによる大規模出水からの避難に関する基礎的研究, 丸山満帆, 神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻 (小林)

気候変動を考慮した和歌山県新宮川流域における浸水・土砂被害評価, 西岡誠悟, 神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻 (小林)

Developing Weather Index Insurance for Drought and Heavy Rainfall in Ghana, 中村皓人, 神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻 (小林)

16.3 卒業研究

リスク・アセスメント研究部門

傾斜データを用いたスロースリップイベントのすべりのインバージョン, 田村和華子, 神戸大学理学部地球惑星科学科 (廣瀬)

デコルマ帯におけるスロースリップの弾塑性論的解釈, 小松美樹, 神戸大学工学部市民工学科 (飯塚)

深海底地盤からのサンプリング試料のモデル化に関する考察, 田窪堯, 神戸大学工学部市民工学科 (飯塚)

構造化された地盤解析手法の検証と適用例, 長浦崇晃, 神戸大学工学部市民工学科 (飯塚)

B値測定における繰り返し载荷の影響, 上原拓真, 神戸大学工学部市民工学科 (橘)

締固め土の三成分状態図を利用した強度評価, 松本昌祥, 神戸大学工学部市民工学科 (橘)

不飽和ベントナイトの吸水/均質化試験シミュレーション, 酒井城, 神戸大学工学部市民工学科 (橘)

断層の動的破壊パラメータの空間不均質分布の推定 ～2016年鳥取県中部地震を例として～, 佐藤圭介, 神戸大学理学部地球惑星学科 (吉岡)

テクトニックな変動から推定した東北地方太平洋沖地震前のプレート間の固着状態と非地震性すべりの時空間分布, 田中もも, 神戸大学理学部地球惑星学科 (吉岡)

線形分散波理論に基づく津波数値シミュレーションプログラムの開発～想定南海地震への適用～, 西田賢人, 神戸大学理学部地球惑星学科 (吉岡)

リスク・マネジメント研究部門

津の波紋, 佐野旭, 神戸大学建築学科 (北後)

商店街に寄り合う, 永谷摩鈴, 神戸大学建築学科 (北後)

リノベーション・コンバージョンに伴う耐震補強の推進に関する研究, 門谷和哉, 神戸大学建築学科 (北後)

長方形断面 CFT 柱の 2 軸曲げ実験, 市川元気, 神戸大学工学部建築学科 (藤永)

コンクリート充填角形鋼管柱の構成則に関する解析的研究, 櫻井陽, 神戸大学工学部建築学科 (藤永)

孔あき鋼板ジベルを用いた CFT 柱継手に関する実験的研究, 貞本尚亮, 神戸大学工学部建築学科 (藤永)

常時微動を用いた護岸舗装直下の空洞の検出試み, 箱田貴大, 神戸大学工学部市民工学科 (長尾)

2016年熊本地震による益城町の地盤震動評価, 梅田遥河, 神戸大学工学部市民工学科 (長尾)

土留め一体型栈橋の耐震性能評価に関する研究, 野村秀太, 神戸大学工学部市民工学科 (長尾)

道路橋の設計地震動合理化に関する研究, 金本和憲, 神戸大学工学部市民工学科 (長尾)

熊本地震を踏まえた液状化時の配水管被害予測手法の提案, 須田瑛哉, 神戸大学工学部市民工学科 (長尾)

振動台実験による管路取り合い部の液状化荷重モデルの評価, 藤川淳生, 神戸大学工学部市民工学科 (長尾)

リスク・コミュニケーション研究部門

ミー散乱ライダーを用いた火山灰粒子観測手法に関する研究, 塩川次郎, 神戸大学工学部市民工学科 (大石哲)

短時間降雨予測精度向上のための近距離レーダーネットワークを用いた三次元風速場解析に関する研究, 大川弘佑, 神戸大学工学部市民工学科 (大石哲)

GPS を用いた大阪湾周辺における水蒸気流入に関する研究, 岸本雅弘, 神戸大学工学部市民工学科 (大石哲)

地域にカスタマイズされた土砂災害危険度提供システムに関する研究, 佐和田光平, 神戸大学工学部市民工学科 (大石哲)

非周期性指標を考慮した声質変換, 伊藤大貴, 神戸大学工学部情報知能工学科 (滝口)

Deep Learning を用いた構音障害者の音声合成, 北村毅, 神戸大学工学部情報知能工学科 (滝口)

脳磁界計測による音声明瞭度に関連した皮質活動の推定, 嵯峨直樹, 神戸大学工学部情報知能工学科 (滝口)

没入型バーチャルリアリティを用いた歩行時の視野計測システムの開発, 仲谷将志, 神戸大学工学部情報知能工学科 (滝口)

ユーザー支援を目的とした音声質問応答システム -オセロゲームの場合について-, 松好祐紀, 神戸大学工学部情報知能工学科 (滝口)

荒川流域大規模複合水害に関する基礎的研究, 友永稜人, 神戸大学工学部市民工学科 (小林)

メソ気象モデル WRF によるメコン河流域の極端降雨に関する基礎的研究, 森本哲平, 神戸大学工学部市民工学科 (小林)

文化財被害推定を可能とする佐用川洪水モデルの開発, 平山博信, 神戸大学工学部市民工学科 (小林)

付録 センター活動の報道記録

南海トラフ巨大地震などの災害が起き、兵庫県で大きな被害が出た場合、被災地で活動するボランティアに安く宿泊施設を提供できるよう、ひょうごボランティアプラザと県旅館ホテル生活衛生同業組合が31日、協定を結んだ。同プラザの室崎益輝所長は「ボランティアへの支援は被災者の命や健康を守ることになる」と指摘。※室崎氏は神戸大名誉教授。

(神戸 4/1 朝刊)

1976年8月、東海(駿河湾)地震説を唱えたのが石橋克彦・神戸大名誉教授だ。石橋さんは「(西日本を襲う)南海トラフと同時の可能性もあるが、単独で起きないとは言い切れない。震災対策を進めるべきだ」と話す。(科学)

(神戸 4/9 朝刊)

消防法で消防用設備の点検報告が義務付けられている施設で、点検が実施されないまま大規模な火災被害に見舞われた例は後を絶たない。室崎益輝・兵庫県立大防災教育研究センター長は「国民全体の防災、防災意識がまだまだ低いことの表れだ。まずは施設所有者の意識の問題だが、消防機関も施設が多すぎて力が及ばないのなら、職員を増やしたり、民間が点検チェックできる仕組みにしたりする対策が必要」と話す。※室崎氏は神戸大名誉教授。

(神戸 4/10 朝刊)

神戸大学都市安全研究センターの学生らが制作した災害復興モニュメントがこのほど、市島町上竹田の「オアシスいつせ」の外壁に移設された。昨年同町上鴨阪の余田義信さん宅の納屋の外壁に設置されたが、今年1月に納屋の取り壊したため、地域住民が集う同施設に移設した。

(丹波新聞 4/14)

熊本県で震度7を記録した地震は、震源が浅く規模の割に揺れが強いことから、1995年の阪神・淡路大震災のような、内陸活断層による直下型地震との見方が、専門家の間で強まっている。室崎益輝・兵庫県立大防災教育センター長は「まずは二次災害の防止。火災の場合はすぐに消火活動をし、山崩れの恐れがあるので急斜面の近くの人にはできるだけ離れることが大事だ」と話す。※室崎氏は神戸大名誉教授。

(神戸 4/15 朝刊)

熊本県益城町で震度7を観測した地震では、建物崩壊が相次いだ。神戸大の石橋克彦・名誉教授は「未知の活断層も多く、同様の地震は日本列島のどこで発生してもおかしくない」、兵庫県立大の室崎益輝・防災教育研究センター長は「九州でも地震への取り組みを進める必要がある」と指摘。※室崎氏は神戸大名誉教授。

(産経 4/15 夕刊、神戸 4/15 朝刊)

震学者の石橋克彦さんが、地震と原発事故が複合する「原発震災」を最初に警告したのは「東海駿河湾)地震説」から約20年後の1997年だ。政府は原発耐震指針を改定したが十分な内容ではなく、指針改訂後、新潟県中越沖地震、東日本大震災が起き、原発震災が現実のものとなってしまった。「事故後の国の審査もいいかげん。これからも声をあげざるを得ない」と話す。※石橋さんは神戸大名誉教授。(科学)

(神戸 4/16 朝刊)

14日に起こった熊本地震について、石橋克彦・神戸大名誉教授は「広い視点で見れば今回の地震も阪神・淡路と同様、海と陸のプレートが押し合う相互作用で生じたひずみの解放が原因。中長期的には南海トラフ地震に近づくステップの一つと見るべき」と話す。

(神戸 4/17 朝刊)

熊本地震発生翌日の15日から被災地に入り、地盤調査を続ける神戸大都市安全研究センターの長尾毅教授は「東日本大震災でもそうだったが、地盤の良しあしが被害の差がきれいに出てしまっている。対策が必要だ」と指摘。

(神戸 4/18 朝刊)

強い揺れが断続的に続く熊本地震では、家を失った人や余震を恐れて避難する住民が急増し、17日は避難所に入りきれない人が多く出た。室崎益輝・神戸大名誉教授は、「プライバシーやストレス回避のため、避難所には早期に仕切りを設けるべきだ」と指摘。

(朝日・読売 4/18 朝刊)

余震が続く熊本地震では、二次災害の危険があるとして熊本県社会福祉協議会がボランティアの受け入れを見送っている。兵庫県立大防災教育センター長の室崎益輝氏は「ボランティアは行政視点でなく、被災者視点で考えるべきだ」と話す。※室崎氏は神戸大名誉教授。

(読売 4/20 朝刊、神戸 4/19 朝刊)

熊本地震で震度7を記録した熊本県益城町などで15日から18日にかけて家屋などの被害調査を行った神戸大都市安全研究センターの長尾毅教授が20日、同大で調査結果を報告した。「軟弱な堆積層や盛り土という地盤のために揺れが増幅され、局地的に被害が大きくなった」と話した。

(神戸 4/21 朝刊)

地震が頻発している熊本県で水道水が濁って飲用として使えず、復旧の障害になっていることが21日、分かった。室崎益輝・神戸大名誉教授は「復旧までは、給水車の派遣やペットボトル飲料水の十分な配給が必要」と話す。

(日経 4/21 朝刊)

熊本地震で震度7を記録した熊本県益城町などで15日から18日にかけて家屋などの被害調査を行った神戸大都市安全研究センターの長尾毅教授が20日、同大で調査結果を報告した。「軟弱な堆積層や盛り土という地盤のために揺れが増幅され、局地的に被害が大きくなった」と話した。

(神戸 4/21 朝刊)

熊本地震の被災地に、全国から続々と支援物資が届いているが、避難所で配給に差が生じている。神戸大の室崎益輝名誉教授は「行政能力がパンクしているならば、被害規模が小さい地域や被災地外に物資拠点を置けば、人手も集められる」と話す。

(毎日 4/22 朝刊)

地震の発生について、地震学者の石橋克彦さんは「大自然の摂理に逆らった野放図な開発を進めた結果、地震などによる悲惨な大災害の危険性を高めてしまった。歴史的事実を正確に知ることが、地震対策の出発点の一つになる」と話す。石橋氏は神戸大名誉教授。(科学)

(神戸 4/23 朝刊)

・熊本地震で震度7を2回記録した熊本県益城町で、建物の被害が集中した地域は、地震の揺れで木造家屋が倒壊しやすい軟弱な地盤とみられるという調査結果を、長尾毅・神戸大教授らがまとめた。

(朝日 4/28 朝刊、読売 4/27 朝刊)

熊本県益城町では、熊本地震の4月14日の前震と同16日の本震で震度7を記録した。同町などで建物の被害調査をした神戸大学都市安全研究センターの藤永隆准教授は「現行の耐震基準は何度も地震に遭うことを想定していない」と話す。

(神戸 5/14 朝刊)

神戸大都市安全研究センターのオープンゼミナールが14日、神戸市危機管理センターで行われ、参加者は海溝型や内陸地震の発生メカニズムや予測の仕組みを学んだ。

(神戸 5/15 朝刊)

熊本地震は住宅倒壊への懸念から避難生活をおくる人の数が膨らみ、ピーク時に18万人を超える事態となった。室崎益輝・兵庫県立大防災教育研究センター長は「余震で不安が高まる事態をどう加味するか、車中泊など避難所以外で過ごす人の存在をどう捉えるか、などについて検討する必要がある」と話す。※室崎氏は神戸大名誉教授。

(読売 5/17 朝刊、神戸 5/16 朝刊)

神戸大学コラム 安心の素 27

家屋は基礎や地盤も大切 都市安全研究センター 教授 長尾 毅

(神戸 5/16 朝刊)

神戸大は28日、同大百年記念館六甲ホールで「熊本震災復興支援講演会」を開き、会場で募金を呼び掛ける。海洋底探査センターの巽好幸教授が、熊本地震の発生と活火山である阿蘇山の関係、都市安全研究センター副センター長の長尾毅教授が、益城町を中心に広がった住宅被害と地盤条件の関連についてそれぞれ話す。

(産経・神戸 5/26 朝刊、毎日 5/24 朝刊)

熊本地震で、公的支援を受けるために不可欠な罹災証明書の発行を巡り、市町村が行った家屋被害の1次調査の判定を不服として、2次調査を求める被災者が増えている。1次は短時間で終わることもあるが、2次は長時間かかることもあることに関して、室崎益輝・神戸大名誉教授は「スピード重視の1次調査は、どうしても大雑把になってしまう。人員不足など行政側の都合で生活再建が左右されることがあってはならず、2次調査を丁寧かつ迅速に進める必要がある」と話す。

(読売 5/25 朝刊)

ゲリラ豪雨の際の浸水被害を細かく予測し、下水道施設の管理や住民への情報提供に役立てる実証事業が福井市と富山市で始まった。メタウォーターを中心とした共同研究体が国の研究機関である国土技術政策総合研究所から受託し、2016年度末まで実施する予定。レーダーシステム技術を持つ古野電気、降雨予測技術を持つ神戸大学なども共同研究体として参画する。

(日経 5/25 朝刊)

26日に開幕する主要国首脳会議(伊勢志摩サミット)では、世界経済の安定や安全保障、感染症への対応などが議題に上る見通しだ。途上国の感染症対策に注目する神戸大附属病院感染症内科診療科長の岩田健太郎さんはアフリカでエボラ出血熱の対応に当たった経験を踏まえ、「施設やスタッフだけでなく、情報も足りない」と訴える。

(神戸 5/26 朝刊)

原子力規制委員会が審査中の中部電力浜岡原子力発電所3、4号機の安全性論議に、地震学者が積極的にかかわる姿勢を見せている。分科会で、石橋克彦・神戸大名誉教授は「浜岡原発は

プレート境界地震について知見がなかった時代に立地が決まり、地震動や地殻変動についてわからない点が多い。施設の損傷や地盤の崩壊、防波壁の損壊などが起こりかねない」と懸念を表明した。

(日経産業 5/27 朝刊)

熊本地震のメカニズムや被災状況を今後の防災に生かす講演会が 28 日、神戸大学で開催された。同大海洋底探査センター長の巽好幸教授は「日本のどこでも地震は起きる。被害を減らすために人口集中、機能集中を避けることが重要だ」とし、同大都市安全研究センターの長尾毅教授は熊本県益城町では軟弱地盤が被害を大きくした可能性を指摘した。

(神戸 5/29 朝刊)

兵庫県立大学防災教育研究センター長の室崎益輝氏は、熊本地震からの学びについて、「不足の事態への備えが十分できているかどうか、地域防災計画を今一度見直してほしい」と話す。
※室崎氏は神戸大名誉教授。

(産経 5/30 夕刊)

熊本地震を踏まえて地域の防災力について考えるシンポジウムが 29 日、福岡大で開催された。室崎益輝・神戸大名誉教授は「ボランティアの拠点を運営する社会福祉協議会に負担がかかり過ぎている。役割分担や支援者を支援する工夫も必要」と話した。

(読売 5/31 朝刊)

熊本地震の罹災証明書を巡る家屋被害判定で、内閣府が発生から 1 か月以上たって、今回は地盤被害が著しいとして、判定に際し配慮するよう熊本県内の市町村に通知したことが分かった。室崎益輝・神戸大名誉教授は「本来は、もっと弾力的に地盤被害を認めるべきだったが、市町村を支援する建築士ら専門家が非常に不足している。あいまいな指針に基づく調査に不服が出るのは当然で、しっかりと 2 次調査ができるよう、国は応援派遣の強化に乗り出すなど積極的に関与するべきだ」と話す。

(読売 6/1 朝刊)

神・淡路大震災や東日本大震災などの経験や教訓を踏まえ、災害対応のあり方を具体的に示した「災害対応ハンドブック」(法律文化社)が刊行された。室崎益輝・神戸大名誉教授ら研究者や弁護士、NPO 法人代表ら 44 人が執筆した。

(朝日 6/7 朝刊)

東日本大震災後の宮城県石巻市の避難所で、被災者に処方された抗菌薬(抗生物質)の約 9 割が、症状に合わない不必要な処方だったとする研究結果を、神戸大や石巻赤十字病院などのチームがまとめた。チームの岩田健太郎・神戸大教授は、「災害時の薬の使い方に正解はないが、避難所という特殊な環境を差し引いても、誤った処方が多い」と指摘。

(読売 6/11 夕刊)

地震などで被災した住宅を自治体が調査し、被害状況を判定する「罹災証明書」の交付業務について、三重県内の市町でも態勢整備の遅れが目立っている。室崎益輝・神戸大名誉教授は「自治体は被害家屋の調査をどれほどの期間で終えるかについて目標を立て、人員規模を算出する必要がある。日頃から職員の研修や他の自治体などとの連携も重要。大規模災害はいつ発生するか分からないという危機感を持ち、国が指針を示すのを待たずに態勢整備を急ぐべきだ」と話す。

(読売 6/16 朝刊)

4月の熊本地震で益城町は28時間の間隔で2度の震度7に見舞われ、軟弱な地盤と相まって被害が拡大した。神戸大学の長尾毅教授は「益城町では深い地盤も浅い地盤も軟弱で、被害の拡大につながった。地域ごとの状況をきめ細かく把握し、揺れやすさを反映した耐震性評価が必要だ」と話す

(日経 6/20)

4月に起きた熊本地震では揺れによる建物被害だけでなく、土砂災害で死亡者が出た。土砂災害から身を守る手立てについて、沖村孝・神戸大名誉教授は「普段から自宅周辺の様子を知っておいて、危険があると感じれば、部屋のレイアウトを変えるなどで命を守れる可能性が高まる」と話す。(ひょうご防災新聞+)

(神戸 6/20 朝刊)

東日本大震災後の避難所で被災者に処方された抗菌薬の約9割が不適切だったとする調査結果を、神戸大や石巻赤十字病院などのチームがまとめた。神戸大の岩田健太郎教授は「検査しづらいなど避難所という環境を差し引いても、不適切な使用が多い」と話す。

(朝日 6/25 朝刊)

7月10日投開票の参院選で、各党は防災や災害復興に関する政策を掲げているが、候補者らが演説などで触れることは少ないことについて、室崎益輝・兵庫県立大防災教育研究センター長は「『耐震化しましょう』『被災者を支援します』というだけではなく、具体的にどう問題解決していくかが問われている」と話す。※室崎氏は神戸大名誉教授。

(神戸 6/28 朝刊)

南海トラフ巨大地震への備えが進む中、東海地震だけに特化するという矛盾を抱えてきた大規模地震対策特別措置法の見直し作業が始まった。石橋克彦・神戸大名誉教授は「震発生の直前に予知できることを前提にするのは望ましくないが、検知した場合にどうするかを検討することは必要だろう」と話す。

(毎日 6/29 朝刊、神戸 6/28 夕刊)

神戸大は28日、情報基盤センター長に飯塚敦教授を選出すると発表した。任期は7月1日から2年間。

(神戸 6/29 朝刊)

南海トラフ巨大地震が想定される地域で、備えの遅れに不安の声が上がっている。室崎益輝・神戸大名誉教授は「大規模災害後の膨大な復興費用を考えれば、最優先で防災に取り組む方が効果的で、ハード、ソフトのどちらかが欠けても災害には対応できない。どんな施策で国民を守るのか、有権者も見極めてほしい」と指摘。

(読売 7/7 朝刊)

神戸新聞情報文化懇話会は22日午後0時20分から、ホテルオークラ神戸で行われる。室崎益輝さんが「熊本地震が問いかけているもの」をテーマに講演する。※室崎氏は神戸大名誉教授。

(神戸 7/13 朝刊)

熊本地震の罹災証明書発行に伴う家屋被害判定で、熊本県内7市町が行った2次調査計8798件のうち、65%の5692件が1次調査より重い判定になったことがわかった。室崎益輝・神戸大名誉教授は「判定が覆った比率をみると、1次調査は形骸化して無駄な作業になりつつある。専門知識がある応援職員や建築士を増員し、1次調査の質を向上させて二度手間を防ぐなどの対策が有効ではないか」と指摘。

(読売 7/17 朝刊)

熊本地震からに見舞われた熊本県では防災に関する官民連携のあり方を見直す機運が高まっている。室崎益輝・神戸大名誉教授(兵庫県立大学防災教育研究センター長)は官民が平時に結ぶ防災協定の意義について、「企業が持つ知識や技術、ノウハウは非常に価値が高い。自治体職員は何でも自前とするのではなく、民間に助けを求めようという発想を持つことが大事だ。阪神大震災や東日本大震災などの教訓を、全国の自治体で生かしてほしい」と話す。

(日経 7/18 朝刊)

神戸大学コラム 安心の素 28

被災建物判定 正しく理解を 都市安全研究センター 准教授 藤永 隆

(神戸 7/18 朝刊)

兵庫県明石市で2001年、花火大会の見物客が歩道橋上で転倒し、子供や高齢者の計11人が死亡、247人が負傷した事故は21日、発生から15年がたった。神戸大都市安全研究センターの北後明彦教授は「対策は群衆が高密度にならないことが前提だ。来場者数や催しの特徴を考え、会場を選ぶ必要がある。想定外の事態が起きても迂回路の設定などができるよう、余裕を持った計画を立てなければならない」と指摘。

(日経 7/21 夕刊)

兵庫・明石 歩道橋事故から15年、神戸大学都市安全研究センターの北後明彦教授は「対策は群衆が高密度にならないことが前提。来場者数や催しの特徴を考え、会場を選ぶ必要がある。想定外の事態が起きても迂回路の設定などができるように、余裕を持った計画を立てなければならない」と指摘する

(The Daily Jakarta Shinbun 7/22)

・神戸新聞情報文化懇話会の7月例会が22日、ホテルオークラ神戸で行われた。兵庫県立大学防災教育研究センター長の室崎益輝氏が「熊本地震が問いかけているもの」と題して講演し、「自然災害は過去の教訓を生かせないこともある。常に不測の事態を想定しておくべき」と強調した。※室崎氏は神戸大名誉教授。

(神戸 7/23 朝刊)

東日本大震災発生時、宮城県石巻市の大川小学校では、地震の約50分後まで児童と教職員が校庭にとどまり、惨事が起きた。2013年2月に発足した第三者検証委員会の委員長を務める神戸大学名誉教授の室崎益輝氏は、「遺族や、亡くなられた方の気持ちに寄り添っていく。そして検証を次の時代の安全につなげたい」と話す。(てんでんこ)

(朝日 8/3 朝刊)

神戸新聞社は河北新報社と共同で9月2、3日の両日、防災ワークショップ「淡路むすび塾」を南淡路市の福良地区で開催する。神戸大都市安全研究センターの北後明彦教授が津波避難訓練の成果や反省点について助言する。

(神戸 8/6 朝刊)

発生から2年となる広島土砂災害の被災地で、住宅の再建が進まない。室崎益輝・神戸大名誉教授は「安全対策が進まず、不安が残ったままでは住民は元の場所に戻れない。行政は、災害に強いまちづくりを住民任せにせず、専門家を交えるなどしてサポートすべきだ」と話す。

(読売 8/20 朝刊)

兵庫県立大は31日、阪神大震災の経験や教訓を生かし、減災や復興に取り組む人材を育成する大学院「減災復興政策研究科」(2年)を2017年4月に設置することについて、文部科学省の認可を受けたと発表した。研究科長には室崎益輝・神戸大名誉教授が就く。

(読売 9/1 朝刊)

紀伊半島大水害で、被害を受けた熊野川の支流高田川に沿って走る県道脇に空き地が続く。室崎益輝・神戸大名誉教授は「都会との交流を図り、山間地の小規模集落の価値を社会で共有していないと、必然的に集落はなくなり、災害はその流れを加速させる」と指摘。

(朝日 9/3 朝刊)

2011年の紀伊半島大水害から5年を機に、三重県と三重大でつくるみえ防災・減災センターは22日午後1~4時、「みえ風水害対策の日シンポジウム」を紀宝町鶴殿の町生涯学習センターで開く。室崎益輝・神戸大名誉教授や西田健町長らが大水害を振り返り、教訓や風水害への備えをパネル討論する。

(読売 9/3 朝刊)

都市部でのゲリラ豪雨などを早期にキャッチし、住民が避難する時間を確保しようと、神戸大や民間企業でつくる研究グループが、大雨の兆候をレーダーで検知して浸水区域の予測情報などを住民に配信する新システムの開発を目指している。

(毎日 9/6 夕刊)

NHK 週刊 ニュース深読み「“はしか” 感染拡大 どう身を守る？」
教授 岩田健太郎先生 出演

(NHK 9月17日)

神戸大学コラム 安心の素 29

災害の教訓 各国と共有 アジア防災センター所長 近藤 共子

(神戸 9/19 朝刊)

神戸大都市安全研究センターの北後明彦教授は、2015年11月、南あわじ市の福良地区自治会と共同で、日中と夜間に津波の避難訓練を実施したことについて、「災害への対応は実際に避難訓練をして『体で覚える』ことが大事だ。訓練を重ね、振り返りをして、問題がなかったことをみんなで考えることで、いざというときの応用力が高められる」と話す。

(神戸 9/26 朝刊)

政府は小型の気象レーダーで自治体が独自に局地豪雨の前兆をつかみ、降雨量や浸水域を予測して5分以内に住民に知らせるシステムを開発した。政府は、小型レーダーやソフトの開発に携わった神戸大や民間企業と協力し、2015年度から福井県と富山県で実証実験を進めてきた。

(読売 9/26 朝刊)

1976年10月29日、山形県酒田市で強風による大火が発生したが、ほぼ2年間で復興し、40年にわたり持続的な発展を果たしている。神戸新聞客員論説委員の室崎益輝氏は「ビジョンやケアをおろそかにしないよう心掛けつつも、スピードを優先的に追求しなければならない」と話す。室崎氏は神戸大名誉教授。(針路 21)

(神戸 10/10 朝刊)

子育てや少子高齢化問題に向き合う兵庫県内3大学の専門家が意見交換するシンポジウムが15日、園田学園女子大で開催された。神戸大大学院保健学研究科の高田哲教授は幼児への本の読み聞かせや障害のある子どもを対象にしたキャンプなどこれまで取り組んできた子育て支援の例を解説した。

(神戸 10/16 朝刊)

東日本大震災の津波で死亡・行方不明になった宮城県石巻市大川小の児童の遺族が市と宮城県に損害賠償を求めた訴訟で、学校側の過失を認めた判決が下り、被告の石巻市や宮城県は結果を重く受け止める姿勢を見せた。第三者検証委員会の委員長を務めた室崎益輝・神戸大名誉教授は「大川小の教員らが避難方法を誤った背景には、十分な防災の研修を受けていないことがある。今回の判決が防災教育全体を変えるきっかけになってほしい」と話した。

(読売 10/27 朝刊)

40年前の酒田大火の教訓を受け継ごうと、山形県酒田市で10月30日、「酒田大火の復興に学ぶ」と題した記念フォーラムが開催された。一環として、火災2日後に現地入りして調査を行った室崎益輝・神戸大名誉教授らの案内で、参加者が再建された商店街や延焼を免れた邸宅などを見学し、復興の軌跡をたどった。

(読売 11/1 朝刊)

鳥取県中部で先月21日に発生した地震で、被災した同県倉吉市が「災害ごみ」の処理に苦慮している。地震で壊れた家具やがれきが受け入れの対象だが、無関係とみられる古びた家電製品などが目立ち、仮置き場を圧迫している。日本災害復興学会特別顧問の室崎益輝・神戸大名誉教授は「災害ごみと便乗ごみの区別を現場で判断するのは難しく、被災者のモラルに任せるしかない。各自治体は事前に実効性のある対策を練る必要がある」と指摘。

(読売 11/7 朝刊)

神戸市内で第6回自治体災害対策全国会議が2日間にわたり開催された。会議を総括した室崎益輝・神戸大名誉教授は「被害や災害が広域化しており、必要とされる応援職員や業務の調整をしっかりとしないといけない。正しく助け合うことが必要だ」と指摘。

(読売 11/17 朝刊)

神戸大学コラム 安心の素 30

最新知識で津波被害軽減を 都市安全研究センター教授 吉岡 祥一

(神戸 11/21 朝刊)

熊本地震では最大震度7の激震が2回起きたことが「想定外」とされたことについて、兵庫県立大防災教育研究センター長の室崎益輝氏は「今、最も求められているのが過去の災害から学ぶという姿勢だ」と話す。室崎氏は神戸大名誉教授。

(毎日 12/14 朝刊)

情報プレゼンター とくダネ! <医療プロジェクト>警戒! 復活型・ノロウイルスについて 教授 岩田健太郎先生 電話取材出演

(フジテレビ 12月15日)

東京都足立区の荒川沿いにある「千住西地区」で、冬の夕方に震度6強の地震が起きたと想定し、東京工業大の大佛(おさらぎ)俊泰教授のシミュレーションでは住民1100人が犠牲になると推定された。室崎益輝・神戸大学名誉教授は「大半の避難場所は学校や公園に定められてい

るが、地区で最も延焼の危険性が薄い場所に設定するといった柔軟な対応が求められる」と話す。(災害大国 被害に学ぶ)

(朝日 12/19 朝刊)

22 日午前 10 時 30 分頃、新潟県糸魚川市大町の中華料理店から出火した火災は、火の勢いが夜まで続き、出火から 10 時間以上経ってから消し止められた。神戸大の室崎益輝名誉教授は「近年は消防の能力が向上し、少々の風では大火は起きない。住宅密集地で消防車が中に入れなかったり、数が足りなかったりしたのか、初期消火について検証する必要がある」と話す。

(神戸 12/25 朝刊、読売 12/23 朝刊)

22 日に糸魚川市で 144 棟を焼いた大火が発生した事件では、被災した地域の周辺には駐車場が点在しており、住宅が密集する地域での消防活動にスペース確保で一翼を担ったとみられる。神戸大の室崎益輝名誉教授は「十分な消火活動ができるスペースを確保するなど今後の都市計画で見直しが必要だ」と指摘。

(読売 12/30 朝刊)

災害時に自力で逃げられない障害者や高齢者ら「避難行動要支援者」について、避難を手助けする人などをあらかじめ定めておく「個別計画」の策定が、兵庫県内で 2.5%にとどまっていることが分かった。神戸大大学院保健学研究科の高田哲教授は「支援の仕組みや大切さを広く知ってもらい取り組みが必要だ」と話す。

(神戸 1/8 朝刊)

17 日で 22 年を迎える阪神大震災は、日本の都市の脆弱さを露呈させ、防災・減災対策が一定程度進む契機となったが、その後の災害で「阪神」の教訓が十分に生かされているとは言い難い。神戸大の室崎益輝名誉教授は「震災は前触れなく起こる。司令塔となる自治体は思考停止に陥らないためにも、職員を被災地に派遣するなどして事前に十分な経験を積み、具体的な災害対応のイメージを培っておくことが重要だ」と指摘。

(日経 1/10 朝刊)

NHK ニュースホット関西 あらすじ 理化学研究所はスーパーコンピューター「京」を活用し、建物の構造や築年数、階数や床面積などを考慮したシュミレーションを可能にした次世代ハザードマップの開発を進めている。自治体も住民の理解のために活用していく。阪神淡路大震災で大きな被害がでた阪神高速でも危険度の高いところを発見したり、緊急時の迂回路を編み出すために使用していきたいとのこと。都市安全研究センター関連出演

(NHK 1月11日)

「ひょうご安全の日 中播磨地域のつどい」が 14 日 13 時半、兵庫県福崎町エルデホールで行われる。沖村孝・神戸大名誉教授が近年の豪雨による水害・土砂災害の発生状況について講演する。

(朝日 1/13 朝刊、神戸 1/10 朝刊)

「第 42 回御蔵学校」が 17 日 8～10 時、神戸市の認定 NPO 法人「まち・コミュニケーション」事務所で開催される。神戸大の室崎益輝名誉教授が災害復興や被災者支援について講演する。

(朝日 1/15 朝刊)

阪神高速道路会社と神戸大学は、スーパーコンピューター「京」を使い、南海トラフ巨大地震が阪神高速(全長約 260 キロ・メートル)に及ぼす被害を予測する研究に本格的に乗り出す。神

戸大に4月、「阪神高速道路減災シミュレーション研究ユニット(仮称)」を設け、2020年をめどに研究成果をまとめる計画だ。

(読売 1/15 朝刊)

47都道府県が2006～2007年度に掲げた住宅の耐震化率を引き上げる目標についてアンケートしたところ、41都道府県が期限の2015年度までの達成は困難だったと答えたことが分かった。室崎益輝・神戸大名誉教授は「命を守るために既存の家を耐震改修するという意識は広まっていないということだろう。行政は改修工事の補助を手厚くして備えた方がよい。戸別訪問などで住民に直接働きかけることも重要だ」と話す。

(朝日 1/16 朝刊)

「災害対策セミナー in 神戸」が23日、神戸国際会議場で始まった。セミナーは24日までで、京都大や神戸大などの研究報告なども行われる。

(読売 1/24 朝刊)

糸魚川市の大火を受け、総務省消防庁は27日、強風時の木造建築密集地域における消防活動の在り方などを考える検討会の初会合を東京都内で開いた。座長の室崎益輝・神戸大名誉教授は「強風時の大火の危険性は各地に存在している。全国に教訓を発信することが必要だ」と話した。

(読売 1/28 朝刊)

イベント「2017ひこばえコンサート&トーク&チャリティーバザール」が東日本大震災の起きた3月11日、宝塚市立男女共同参画センター・エルで開催される。兵庫県立大防災教育センター長の室崎益輝・神戸大名誉教授が「正しく恐れて、正しく備えること」と題して講演する。

(毎日 2/8 朝刊)

感染症の治療に有効な抗菌薬(抗生物質)が効かない「耐性菌」が世界の医療現場で猛威を振るい、国内でも大きな問題となっている。岩田健太郎・神戸大大学院医学研究科教授は、耐性菌対策の難しさを「一筋縄ではいかない。薄い紙を重ねていくような細かな積み上げが必要」と話す。

(毎日 2/15 朝刊)

災害や犯罪、交通事故などの身近な危険を地図にまとめ、防災・防犯意識を高めてもらう「第13回小学生のぼうさい探検隊マップコンクール」の表彰式が、1月21日に東京都千代田区の損保会館で行われた。審査員長の室崎益輝・神戸大学名誉教授は「被災地から、子どもたちの作品が出るようになった。それだけ、子どもたちが少し被害から立ち直って元気になりつつあることが、作品から理解できます」と話す。

(朝日 2/18 朝刊)

事務用品通販会社「アスクル」の物流倉庫で起きた火災から23日朝で発生から丸1週間が経った。北後明彦・神戸大都市安全研究センター教授は「火の回りが早かったことを考慮すると、防火設備が法令通りに設置されていても、ちゃんと機能したかどうかを検証する必要がある。巨大な施設であれば影響も大きく、リスク管理を徹底する責務がある」と話す。

(毎日 2/24 朝刊)

琵琶湖・淀川流域の治水や生態系保全を巡る課題と関西広域連合の役割を考えるシンポジウムが27日、大阪北区の大阪府国際会議場であった。パネル討論では、神戸大の小林健一郎准教

授がスーパーコンピューター「京」を使って高い解像度で流域の浸水被害を予測する手法を説明し、「広域連合が（洪水に備えた）保険を検討する場合、保険料率設定に参考になる」と述べた。

(京都新聞 2/27)

自然災害の記憶継承などについて考える「全国被災地語り部シンポジウム in 西日本」2日目が27日、淡路夢舞台国際会議場で行われた。室崎益輝・兵庫県立大防災教育研究センター長が「1億総語り部」の実現を提唱し、閉会した。※室崎氏は神戸大名誉教授。

(神戸 2/28 朝刊)

東日本大震災の被災地である岩手、宮城、福島3県の沿岸部では計308地区で防災集団移転が行われている。神戸大の室崎益輝名誉教授は「集団移転は津波からの安全性を優先した計画なので、行政には住民の生活を守る責務がある。買い物や交通の不便さを解消しなければ、人口はさらに流出してしまう」と話す。(連載)

(読売 3/6 朝刊)

今年2月末、兵庫県淡路市で「全国被災地語り部シンポジウム」が開催された。阪神大震災の語り部や、昨年4月に起きた熊本地震の被災地関係者も登壇し、教訓を伝え続けるため、各地の語り部が連携していくことが確認された。コーディネーターの神戸大名誉教授の室崎益輝さんは「教訓を伝える主人公になるべきは人間だ。みんなが語らなければいけない」と話した。(連載)

(読売 3/11 朝刊)

東日本大震災から6年となった11日、阪神間の各地で追悼行事や復興支援行事が行われた。宝塚市栄町の市立男女共同参画センター・エルでは、防災や被災地支援を考える「2017 ひこばえコンサート&トーク&チャリティバザール」が開催された。室崎益輝・神戸大名誉教授が「正しく恐れて、正しく備える」と題して講演し、減災のポイントに、住宅の耐震化や「自分は助かる」と思わずに避難することを挙げ、「徹底できれば、犠牲者が最大32万人とされる南海トラフ巨大地震でも、1000人程度に減らせる」と話した。

(読売 3/12 朝刊)

神戸大学コラム 安心の素 31

イベントで学ぶ防災文化 JICA 関西国際センター次長 田和正裕

(神戸 3/20 朝刊)

災害の教訓を次世代につなぐ「全国被災地語り部シンポジウム in 西日本」が2月26、27日、兵庫県淡路市の淡路夢舞台国際会議場で行われた。基調講演では、公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長兼熊本県立大学理事長の五百旗頭真氏が「どこにいても地震は起きる。そのために備えておき、いざ起きたときは日本全国が一丸となって、順番に支え合うことが大切だ」と話した。パネルディスカッションでは、兵庫県立防災教育研究センターの室崎益輝センター長がコーディネーターと務めた。※五百旗頭氏、室崎氏は神戸大名誉教授。

(神戸 3/25 朝刊)